

---

# 連理の咲く庭 side storys

珀志水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

連理の咲く庭      s i d e      s t o r y s

### 【Nコード】

N 0 9 5 1 Q

### 【作者名】

珀志水

### 【あらすじ】

連理の咲く庭のサイドストーリー！。

こちらは思いついたら書く程度なので不定期更新です。

殆どが一話完結。

たまに続きものあり。

リクというかネタ募集中。

喪失（加奈子&英明）（前書き）

2 話後の現実世界のお話

## 喪失（加奈子&英明）

仕事から帰ってきて、英明がまず不審に思ったのは、家の明かりが点いていないことだった。

玄関の明かりを点けて、靴を確認すると、妻である加奈子の靴が整然と並べられている。

外には出ていないことがわかり、余計に不審に思えた。

寝ているのかと思い、靴を脱いで寝室の戸を開けるも、誰もいない。

リビングへの境戸を開けて、眉をひそめた。

「カナ？」

ソファアーの上で膝を抱いた人影が、びくりと震えた。

真っ暗な部屋では様子を確認することも出来ず、電気を点ける。

パツと明るくなった部屋で、加奈子が目を真っ赤に腫らして、涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら泣いていた。

「ひっ、ひでちゃあん」

泣きはらした顔の加奈子の足元。

乱雑に置かれた学生鞆で、なんとなく英明は事態を悟った。

「あのバカ娘<sup>蓮</sup>に何かあったのか？」

つい最近まで一緒に暮らしていた、加奈子の姪　蓮。

幼いころに両親を亡くし、兄まで行方不明になり、親戚が揉めに揉めて、まだ24だった叔母である加奈子がほぼ無理矢理に引き取った少女。

英明自身はあまり好くは思っていなかったが、加奈子が実の娘のように猫可愛がりしていた少女に、何かあったのだ。

「け、警察に、お、落し物だって、れんらくきて…」

「落し物つて、鞆がか？」

「交番の前に置き去りにされてたつて。き、緊急連絡先が、私の携帯だったから、私に連絡来て」

「あのバカ娘はどうしたんだ」

加奈子がヒュツと息を呑んで、瞳いっぱい涙をためて俯く。

「い、いなくなっちゃった…」

失踪。

その二文字が英明の頭の中で浮かんだ。

同時に、どうしようもない怒りを覚える。

「あんのバカがつ！」

怒りの対象がいらないだけに、苛立ちが増幅する。

それを壁を殴ることで何とか押しとどめていると、くいつとシャツの裾を引つ張られた。

「こ、これ…」

握りしめていたのだらう、汗でふやけ、ぐしゃぐしゃになった紙を手渡された。

そこには達筆で綺麗な字で、こう書かれていた。

加奈子さんへ

今まで大変お世話になりました。

ここまで育ててくれて本当にありがとう。

説明すると長いし、

英明さんあたりが絶対納得しなさそうなので省きますが、

兄さんの下に行くことになりました。

そっちに行くと、もう戻ってくることもできないそうです。

なので部屋に置いてある通帳とかいろいろ、好きにしちゃってください。

私にはもう必要ないので。

兄さんの下と言っても自殺するわけではないからね。

兄さんと一緒に幸せになりに行つてきます。  
加奈子さんも英明さんと明奈とお幸せに。  
それでは。

さようなら

蓮

さようならという言葉だけが、やけに鮮明に見えた。

「予想、当たっちゃった」

ふふつと、泣きながら加奈子が笑う。

「予想？」

「うん。彬くん…蓮ちゃんのお兄ちゃん、16歳の時にいなくなつたの。蓮ちゃん、もうすぐいなくなっちゃうんじゃないかって、近頃ずっと思ってた」

ああ、そう言えば誕生日まで1ヶ月もないなど、英明は壁に掛けられたカレンダーを見た。

今は7月の初頭。

蓮の誕生日は7月の終わりだった。

「手紙見ても、信じられなくてね。部屋も学校も、バイト先にまで探しに行っちゃった」

ガラスのテーブルに置かれた、蓮のものだろう携帯を握りしめて、加奈子は英明に縋りついた。

「蓮ちゃん、いなくなっちゃったよう」

子供のように声を上げて泣く加奈子を英明はしっかりと抱きしめる。

影に隠れて見えなかったが、加奈子の隣で眠ってた娘の明奈もその泣き声で起き、つられて泣きだした。

明奈を宥めながら、英明は自分も泣いていることに気付いた。

好ましく思っていなかったにしても、あの少女がいなくなるとは考えていなかった。

加奈子との付き合いが長かった分、少女を歳の離れた妹のように見ていた。

それが、こうして突然に失われるものとは、思っていなかったのだ。

胸の奥で穴が開いたような喪失感を感じながら、英明は一つ決意した。

もしも戻ってくるものがあつたならば、その時は絶対に一度ぶん殴り、加奈子と一緒にめいっばい抱きしめてやろうと。

喪失（加奈子&英明）（後書き）

加奈子さんはほわわんとした人。  
英明さんは苦勞性。

朝の出来事（お披露目後）（前書き）

短いです

## 朝の出来事（お披露目後）

「レーン。朝だよー」

目覚まし時計なんて便利な物がない、セイシャリー。

マーノンにその役目を押し付けてみたら、非常によろしくないことになった。

「うぐっ…」

人の上に馬乗りにならないでくださいませんか、マーノン。  
苦しい。

肺押しつぶされて苦しいよ！

「ああ、ごめんね」

「…わざとだろ。絶対わざとだろ、テメエ」

上半身を起こしながら、胸を擦る。

こいつ、いつか私を殺す気なんだ。

絶対そうだ。

「そんなことより、もう11時だからね」

「…はっ!？」

壁に掛けられた時計を見る。

確かに11時だった。

「寝坊した!」

6時に起こせと言ったのに！

寝坊というからには予定がある。

8時に図書館の司書さんが蔵書室を開けてくれると言ったのだ。

蔵書室は司書さんと一緒じゃなくて入れなくて、いつもお昼からしかない司書さんが朝から開けてくれると約束してくれたのだ。

「マーノンのバカあ!」

くそう。

せつかく朝から本漬けだと息巻いていたのに！！

すぐさま侍女を呼んで着替えを持ってきてもらう。

その間に髪の毛をブラッシングしていると、ブラシをマーノンに取られた。

「そんな乱暴にしちゃダメだよ」

「うつさい！」

起きられなかったのは自分なので、マーノンのせいだとは罵倒できない。

無駄に丁寧に髪を梳くてはいつもと変わらないのに、今日だけはもどかしくてたまらなかった。

結わえてまでもらい、それがすむと走って隣の部屋に移動する。

侍女から服を受け取り、手早く着替えを済ませると、私は朝食はいらないと断ってから部屋を出た。

「本当はまだ8時なんだけどねえ」

時計の針を戻しながら、マーノンは咽喉を鳴らした。

**朝の出来事（お披露目後）（後書き）**

時間は24時間で。

（本編では変わるかも…。その時にはこっちの修正入れます）

幸せの結晶（蓮&加奈子）（前書き）

過去話。

## 幸せの結晶（蓮＆加奈子）

覚えているのは白。

真っ白な雪が日に照らされて、目が痛くなるほど輝いていた。その輝きから目を逸らすために、膝を抱え顔をうずめて、寒さがくぐくと震えながら縮こまっていた。

雪で濡れた地面にじんわりと尻が冷やされても、もう立つ力など残っていないかった。

寒さで鈍ったのは体だけでなく、思考力さえ奪われて。

ぎゅっと目を瞑っても、照らされる雪で俄かに白む闇だけで、完全な闇も来ない世界の中。

意識が真っ暗な闇へと沈もうとした瞬間、感じたのは体を包む温かな温度だった。

「蓮ちゃん。おかゆ食べる？」

手に持ったお碗を示しながら聞いてくる加奈子に、蓮は声もなく首を傾いただけだった。

「お腹、空いてない？」

熱はもうだいぶ下がったが、蓮の頬はまだ熱に浮かされたように赤らんでいる。

もしかしたらぶり返すかもしれないと額に手を寄せると、蓮が小さく口を開いた。

「おにいちゃん、どこ…？」

虚ろな瞳が、手が、何かを探すように彷徨う。

兄はもうどこにもいないんだと、大人たちの前で堂々と言い切っ

たその口で、小さな子供は自身のよすがを探していた。

どこ…どこ…？と、加奈子の手から逃れるように身をよじり、何もない空を手が彷徨う。

その姿を痛々しく思いながら、加奈子は年齢にしては小さな体を柔らかに抱きしめた。

すると、びくりと体を震わして、蓮の動きが止まる。

強張った体をそれでもずっと抱きしめっていると、次第に体から力が抜けていった。

肩に頭を預けてそのまま眠ってしまった蓮に、加奈子は「ごめんね」と小さく謝った。

虐待の痕が残る小さな体。

最近のものばかりではなく、古いものも多く残っていると、医師が言っていた。

年に一度は会っていたのに、一度たりともその事実気付けなかった自分を加奈子は責めた。

思い返せば不審なことは多々あったのに、そのどれも気のせいだと目を逸らし続けて。

蓮の両親が死に、多々問題が起こった後で母方の親戚筋に引き取られ、蓮はよりひどい虐待を受けていた。

加奈子が蓮を見つけた時、真っ白な雪が降り積もった家の外で寒さに凍え、死にかけていた。

あと一歩遅かったらなど考えると、背筋が凍る思いだ。

「幸せに、なろうね」

まだ6歳の蓮は、もう十二分にその小さな体では背負いきれないほどの不幸を背負ったはずだ。

なら後は幸せになるだけ。

この子供をめぐってに幸せにするんだと、加奈子はその小さな体に誓った。

まだ24だった加奈子が蓮を引き取ると言い出した時、親戚中が反対したが、結局は加奈子に軍配が上がった。

24にしてすでにきちんとした収入もあり、蓮を引き取ったことで生活自体に問題はなく、それ以上に蓮が加奈子に懐いていたのが要因だった。

それから数年。

中学生になったんだから一人部屋をという加奈子の言葉のまま、2DKのアパートから2LDKのマンションへと引っ越した。

蓮は当初、家賃の高さなどから相当渋ったのだが、引っ越しを済ませてしまえば何も言わず、それどころか引っ越してよかったとまで思うようになっていた。

アパートで暮らしていた時は一緒に就寝がお約束だったが、部屋が別となればそれもなく、それどころか蓮にとっては追い立てやすい状況となったためだ。

付き合っている男がいるくせに、お泊まり厳禁、8時には帰宅を引き取った時から忠実に守っていた加奈子に、加奈子の恋人である英明からどれだけ恨みを買っていたことが。

それに気付かないほど蓮は疎くなく、ましてや鈍感でもなかった恋人とも順調な加奈子を祝福し、それなりに充実した日々を送っていた昼下がり。

空気の入れ替えに窓を開けたその下。

マンションの入り口で何やら百面相を繰り広げている怪しい男を蓮は目撃してしまった。

見て見ぬふりをしたい。

そう切実に思った蓮だったが、しかし、男が知り合いだということとはマンションの住人に知れているために、仕方なく部屋の奥で掃除をしている加奈子へと声をかけた。

「加奈子さん、不審者が通報されないうちにマンションの入り口にゴー！」

「え？え？」

「はーやーくー！」

背中を押して、サンダルを足に引っ掛けた加奈子を玄関から追い

出す。

しっかり鍵を閉めて、加奈子が不思議そうにそれでも歩き出したのをドアスコープから見送って、開け放った窓へと駆け戻る。

未だに傍目不審者な男がいるのを確認し、まだかまだかと待っている、どうやら履き違えたらしい片方ずつ違うサンダルに、歩きづらそうにひよこひよここと加奈子がやってきた。

そこから後はご近所でも噂になるくらいの痴話げんかと公開プロポーズだ。

蓮としては寝耳に水だったが、蓮という時間が減るという理由で英明は加奈子から別れを切り出されていたらしい。

痴話げんかの末、だったら結婚すれば問題ないだろう！？という勢いに任せた言葉が英明の口から出てきた時は、やっとかと蓮は苦笑した。

もつずっと、加奈子が自分の歳を気にして、結婚を切り出してもられないことを悩んでいたのだ。

ようやく切り出してもらえた結婚に、加奈子が泣きながら、でも幸せそうに笑うのを見て、蓮は心が温かくなるのを感じていた。

「幸せに、なろうね」

温かい腕に抱きしめられながら、夢現に聞いた言葉を蓮は忘れてはいなかった。

どこか張り裂けんばかりの願いが込められた言葉。

「幸せだよ。大切な人が幸せで、幸せだよ」

睦まじく抱きしめあう恋人たちの姿に、蓮はひっそりと祝福の涙をこぼした。

**幸せの結晶（蓮&加奈子）（後書き）**

プロポーズ時、加奈子さん30歳。  
英明さん32歳。

## ダンスの話（元・拍手お礼）（前書き）

拍手お礼だった、蓮とマーノン（10話で省いたダンスの話）の  
会話文に肉付けしたものです

## ダンスの話（元・拍手お礼）

1、2、3。1、2、3。

聞こえてくるそのリズムはしかし、実際は12、…3。1、2、…3。と、狂いまくりだ。

「レーン、さつきから何してるの？」

思わずマーノンがこう問いかけても無理もないその光景に、蓮は平然とこう答えた。

「え、ダンスの練習」

「……………」

今のが？と問うことも赦されないような気がして、マーノンの目に憐れみが浮かぶ。

「つちよ、何その反応！？」

「人間のダンスっていうの何度か見たことはあるけど、レーンのはあれだね…」

「あれ？」

「踊りっていうものですらないよね」

多分、亀がばたついてるほうがよほどマシだと思う。

とはさすがに口にしない心やさしいマーノンのだが、言いたいことをなんとなく察してしまった蓮にしてみれば、嫌味にしか聞こえない。

「…うっさいバカ！！」

顔を真っ赤にして怒鳴る蓮に、マーノンは内心にやけっぱなしだった。

だって可愛い。

涙目になっちゃって、すごい可愛い。

ぶるぶる震えちゃって、ヤバいくらい可愛い。

力いっぱい抱きしめたいけど、でもそんなことしたら本格的に拗ねそうだ。

抱きしめるのは諦めて、もう少し弄ることにした。

「動きなんて普通決まってるモノだよね？」

「だって…？」

「全然動きが定まってないよね、レーン」

「だって…」

踊れないことを相当気にしていたようで、蓮は本格的に落ち込みだしてしまった。

ダンスの練習始めてもう5日目。

本番は明後日だ。

一向に上達しないことに焦っているのも知っていたマーノンは、いじめすぎたかなと頭を掻いた。

「しょうがないな…」

俯いて立ちつくす蓮の前にマーノンが立つ。

「うん？」

何をする気だと睨みつけてきた蓮に、マーノンは右手を差し出した。

「はい、手」

有無を言わせない言葉に、反射的に手を乗せた蓮の腰に、左手を添える。

「うえっ!？」

「はい右足、前。…どうして踏むほどに足出すのかな」

意図的にとしか思えないほどの強さで踏まれ、マーノンが顔を顰める。

体を離して靴を見れば、くつきりと痕が残っていた。

「ごめんなさい！」

真っ青になつて謝る蓮に、もう一度手を差し出す。

「半歩でいいんだよ、半歩で」

「半歩。…うん、半歩ね」

「もう一回行くよ?」

「うん」

腰に手を添えて問うと、真剣な顔をして蓮が頷いたので、リズムを刻みながらマーノンは足を動かした。

「……リードに逆らおうとするのはなんですか?」

同じ失敗をしないだけマシかとは思うものの、どうにも反対へ反対へ動こうとしているかのように抵抗を感じるマーノンに、蓮はむーっと眉間にしわを寄せる。

「いや、逆らう気はないよ? ないんだけど……」

「体の力は適度に抜けばいいんだよ。レーンてばガチガチ」

リードに流されるだけで、それなりに様になるだろうと溜息をこぼされ、蓮はいじけたように視線を落とした。

「だって、こういう体が密着してると思うと、なんか体に力が入っちゃって」

抱きついたりする時はそうでもないくせに何を言ってるんだろうこの子は、と呆れと驚きに押し黙ったマーノンの沈黙が痛かったのか、蓮は必死に弁解する。

「それでもレッスンの時よりいいんだよ? 今日なんて足踏み出そうとして、纏れて転んだからね!」

それだけ信頼されていると喜べばいいのか。

どちらにしろ踊れていない時点でそう変わり映えしないが。

「自慢になってないよ、レーン」

「わかってるよ」

「とりあえずステップ覚えようか」

リードに流されてくれないなら、より正確にステップを覚えるべきだろうとマーノンは判断した。

けれど、蓮はそれがお気に召さないらしい。

「……覚えたつもりなんだけどなあ」

「なら一人でまともにステップ踏めるようになろうよ」

「……………ハイ」

きつと、頭の中では正確に覚えているのだろつ。

それに体がついていかないどころか、変な方向に動くだけで。

「まあ、僕も見て知ってるだけで実際踊るの初めてだからね」

「あれ、そうなの？」

ちゃんと踊れるのにと見上げてくる蓮に、マーノンは苦笑した。  
ちよつと考えればわかるだろうに。

マーノンが“人間が”踊るダンスなど、普通なら見向きもしない  
ことが。

「うん。覚えたのだって、レーンの練習遠目で見てたからだし」

「…み、見るな！」

ああ可愛いなあ。

握っていた手を離して、右手も腰にまわしてへらりとマーノンが  
笑つ。

「どれだけレーンがこけたって、気にしないから大丈夫だよ」

「私が気にする！」

「ただ、体に傷はつけないようにね」

傷なんてつけたらリイにお願いしてこの国滅ぼそう。

そんなことをマーノンが考えているとは露とも知らない蓮は、肩  
を殴りつけながら喚いた。

「人の話聞こうぜ、この野郎！？」

「さて、練習の続きしようか？」

殴りつけてくる手を取って、練習を再開しようとするマーノンに、  
蓮は暴れた。

「もういやだ！離せ！今日はもう文字の練習して寝るんだから！」

「はいはい」

「いーやーだー！ー！ー！ー！ー！」

抵抗も空しく、その後みっちり練習させられた蓮だった。

マーノンとはしっかり踊れるようになった翌日の昼間。

練習相手の講師とは依然として踊れず、マーノンとの練習は全く

もって無駄となった。

## ダンスの話（元・拍手お礼）（後書き）

マーノンの人気が右肩上がり過ぎていじけた（俺が。  
変態にしようと頑張ったら、単なる蓮馬鹿になった…。

ゲテモノ (元・拍手お礼) (前書き)

拍手お礼だった、蓮とヴォルド(晩餐中小ネタ)の会話文に肉付けしたものです

ゲテモノ（元・拍手お礼）

「これは？」

習慣と化した晚餐の中、これまた習慣と化した問いを私は繰り返す。

何故って、そりゃ見た目有り得ない食べ物が多いからだ。

最初は黙々と食べてたけれど、その有り得なさの度合いが日増しに強くなってる気がする。

「スーデルだ」

「魚？」

乳白色のそれは、フォークでつついてみた感触では魚というには固い。

「肉だ」

「肉！？」

肉なのに白いのか。

いや、でも今日の昼に食べたハンバーグに似たのは、普通にいい具合の茶褐色だった。

「なにかおかしいか？」

「や、肉にしては…白い」

「そういうものだからな」

さも当然といったヴォルドに、おそろおそろ一口食べてみる。

「あ、肉の食感…」

味は普通。食感も普通。

見た目の白ささえ目をつむれば、なんてことはない、普通の牛肉だ。

「……うまいか？」

「まあまあ。ソースはもう少し濃くてもいいかも」  
「そうか」

この国の料理は基本的にうす味すぎて物足りないことが多い。  
自分で料理しちやいたいくらいだが、材料が材料なので断念して  
いる。

「スーデルってどういう動物？」

やっぱり恰幅のいい動物なんだろうか。

丸々太った動物を連想した私に、ヴォルドが首を振った。

「いや、植物だ」

「……………植物？」

「ああ。食人植物でな。野生のものはとるのがなかなか難しい」

食人？

今食人って言った？

…え？つてことはなんだ？

この肉…。

「……………げえっ」

吐き気を覚えた私は、マナーも忘れて胃から絞り出したくなった。  
今すぐに！

「どうした」

「気持ち悪い……」

口を手で覆いながら、スーデルがのつた皿を押し退かす。

それで合点がいったのか、ヴォルドは付け加えるように説明した。  
「それは養殖だ。餌は魚を食べさせているから、なかなか淡泊だと思  
うんだが」

養殖できるのか。

育てる人大変そうだな。

「養殖……。あ、でもだめ」

「何がだめなんだ」

「植物が人間バリバリ頭から食べてる想像しちやったのよ、バカ！  
……」

「それは災難だったな」

淡々とした言葉に腹立たしさを覚えながらも、スーデルの盛り合わせの緑色をしたゼリーに似たものに手を伸ばす。

「……こっちは何？」

「クロンデンだ」

「野菜……？」

「いや、海藻だな」

「海藻？」

「ああ。……あ」

海藻ならば大丈夫かと思い、口に入れた瞬間ぞわぞわつと鳥肌が立った。

「うあっ！まつずい！！」

こればかりはすぐさま吐き出してしまった。

とてもじゃないが飲み込めた味じゃない。

「それはそこにあるソースをかけるものだ」

言われてスーデルにだけかけたソースの存在を思い出したが、後の祭りだ。

「先に言えつての！！」

「すまん」

笑い堪えながらじゃ誠意がねえよ！

そう怒鳴りたいけれど、口の中に残る異様さにそんなことも言っ  
てられない。

「うう……。まだ口の中に後味が……。何この味」

生ごみに臭みが残ったままの肝すり潰して凝縮したような……。

こんな味だけど、多分ソースかけたら美味なんだろうな。

この間のデザートみたいに。

「海藻といっても、それは内臓だからな」

「な……っ！？」

やっぱり内臓系か！

レバーとか苦手だから余計に食べれないよ、もう。

「そんなにだめか？」

「ゲテモノ多すぎない？朝食昼食そうでもないのに」

素材を知らないから言えることなのかもしれないが、それがなくてもソースかけて味が変わるような、この世界特有とも言える料理は一人で食事をする分にはついぞお目にかかっていない。

出てくるのはヴォルドとの晚餐のみだ。

「この晚餐以外は、普通に食べれる物以外は出させないようにしている」

「それはそれは…」

晚餐にそれらを出す意味は何だと睨みつければ、疲れたように肩を落とされた。

「ダミアンがこの晚餐で会話のきっかけにしろと」

ダミアン…宰相閣下か！

なるほど、それで。

「色々出してるわけですか…」

「そういうことだな。クロンデンは私もあまり食べない」

「…」

いじめか…！

これは新手のいじめなんでしょうか！？

本気でゲテモノかよ…！

打ちひしがれている私に、氣遣うようにヴォルドが言った。

「デザートを食べるか？」

「それを食べずに何を食べると？」

こんなゲテモノで食事を終えさせられてたまるか…！

そう睨みつければ、ヴォルドはややたじろいだ。

「いや…」

まあ、これはヴォルドのせい、とはいうわけではないだろう。

しっかり同じ料理を食べてることですし。

八つ当たりをやめて、やってきたデザートに舌鼓を打ちながら私は言った。

「ゲテモノはもういいです。今度から普通に食べれる物お願いします」

「わかった。そう伝えよう」

「お願いします」

切実な願いに、ヴォルドは深く頷いた。

ゲテモノ (元・拍手お礼) (後書き)

こうしてゲテモノは晩餐から排除されました、という話。

陛下の女嫌い (元・拍手お礼会話文) (前書き)

拍手お礼だった、アナクとダミアンとエリック(ヴォルドの女嫌いに  
関する話)の会話文です

陛下の女嫌い（元・拍手お礼会話文）

「父様。陛下は本当に女性がお嫌いなのですか？」

「嫌いどころのお話ではありませんよ」

「だな。あれは一種の病気だと思うぞ」

「公式の国外の客人ならば、節度ある対応をしてくれるのですけどね」

「自国の女と非公式の客人は、視界に入っただけで機嫌悪くなるしな」

「そんなにですか？」

「視界に入るってくらいなら機嫌が悪くなるだけでいいけどよ、触ったとなると……」

「剣の柄で打ち払って、その場に放置ですからね」

「夜這に来た姫はどうなったっけ？」

「斬首にならなかったのが奇跡でしたね。実家に謹慎ではなかったですか？」

「国外追放もなかったか？」

「ありましたね」

「……」

「ははっ、坊主は開いた口がふさがらねえってよ」

「まだまだマシな方だとは思うのですが」

「坊主の世代じゃ知らねえだろ」

「え？え？」

「一番ひどかったのは、陛下の唇を奪ったベリランシェの姫でしたね」

「問答無用で斬ったからな。死ななかったのが奇跡だろ？」

「手加減なされていたようですよ？」

「殺すつもりだったら死んでるって。でも相当危なかったって聞いたぜ？」

「我が国の医術は大陸一ですからね」

「傷跡残って、あの姫嫁の貰い手あったのかね？」

「2年前に嫁がれたと聞きましたよ？顔だけはよろしかったですから」

「くくっ…、あはははっ」

「わ、笑い事なんでしょうか…」

「エリック。もう少し神経を凶太く持っていなければ、陛下の侍従はやってられませんよ」

「は、はい！」

「ぶくくくっ」

殺してないだけマシだと思え。

は、この会話の内容を後に聞いたヴォルド談

陛下の女嫌い (元・拍手お礼会話文) (後書き)

いつか他二作のように肉付けしたいけど、今少しこのままで…。

## 酒盛り後（前書き）

時系列無視つてます  
パ口としてお楽しみください

## 酒盛り後

「マノレイ！」

これでもかというほど胸を反って堂々と呼んだ蓮に、いつも通り応えてやってきたマーノンは、目の前の光景にうん？と首を傾げた。蓮の足元には屍累々となった男どもがいて、そこから少し離れたところで皇帝であるヴォルドが苦笑交じりに目礼してくる。

充滿する酒の匂いに、なるほど、酒盛りをしていたのかと、にへと笑って抱きついてくる蓮を抱きしめながらマーノンは納得した。

目礼のみで、そのまま酒を飲み続けているヴォルドを見ると、かなりの量を飲んでいるようだ。

「レーン、お酒飲んだの？」

「うん！あまくておいしーの！」

につこにつこと笑う蓮の可愛さに、マーノンもへらりと笑う。酔ってるせいか、舌足らずで幼い印象を受けた。

機嫌のいい蓮を抱き上げて、マーノンはヴォルドの前に座る。

「これってどういう状況？」

「…レーンが酒を飲みたいと言いだして、カミツロがそれに便乗を」  
マーノンに新しい杯を用意して、それに酒を注ぎながらヴォルドが説明する。

顔色は常時と変わらないのに、随分と酔っているようだ。

「それでこの惨状か…。レーンが可愛いからいいや」

何が楽しいのか、きやつきゃつとはしゃぐ蓮を腕の中に抱きしめながら、ヴォルドから受け取った酒にマーノンも口をつける。

「…これ」

一口飲んでから、マーノンは酒瓶を手にとった。  
「やっぱり」

この世界で一番アルコール度数が高い酒であるデーティ酒だ。  
神々の間では酒といえばこれだが、人間たちにとってこの酒は並  
大抵の酒豪では太刀打ちできないと言われる酒だ。

その酒瓶が、ヴォルドの傍にごろごろと転がっている。

もちろん、それらすべて空き瓶だ。

「さすが皇帝！　っていうところかな」

「んー！　マーノンちゅー！」

ちゅーと言いながら、蓮はマーノンの頭をかかえるように抱きし  
めている。

「レーン、何がしたいの」

「ちゅー！　マーノンとヴォルド！」

これは二人とキスをしたという意味か。

それとも二人でキスをしろという意味か。

わからないが、とりあえずまた腕の中に閉じ込めて、マーノンは  
蓮の頬に口付けた。

「はい、ちゅー。レーン、皇帝には自分からしてあげな」

「うん！」

ほっぺにキスがそんなに嬉しかったのか、蓮はいい子の返事で勢  
い良く頷いて、こちらに気にした様子もなく酒を飲み続けていたヴ  
ォルドへと抱きついた。

あまりの勢いに縛れるように二人は倒れこんだ。

「ヴォルドー！」

「…ん、レーンか」

「ちゅーしよ、ちゅー！」

いいながら、すでに顔中にキスを落としている蓮に、ヴォルドは  
心地よさそうに目を細めながら、お返しにと唇に啄ばむようなキス  
を落とす。

二人のじゃれあいを見ながら、もしかして蓮はキス魔なのだろう

かと、マーノンは心配になった。

貞操観念自体が希薄な蓮だ。

もし外で酒を飲んで、その都度誰かれ構わずキスなんてしたら襲ってくれといってるようなものだろう。

今襲われないのは相手がヴォルドだからにすぎない。

「ねえ、レーンは僕が来る前もこんな感じだったの？」

「……」

ちゅー！とまだ言っている蓮をそのままに、ヴォルドは少し考え込んだ。

それから緩慢な動作で顔をあげる。

「いや、反撃できないことをいいことに、アナクたちに理不尽な命令をして殴っていたくらいだ」

「…そう」

キス魔より性質が悪そうだ。

となると、今のこの状態は相手が僕と皇帝だからか？とマーノンは首を傾げなくなった。

「マーノン、ちゅー！」

「ちゅーはもういいから寝ようね、レーン」

無理矢理横にさせて、膝に頭を乗せる。

ちよつと唇を尖らせたものの、すでに眠かったのか、蓮はすぐに大人しくなって目を瞑った。

寝息が聞こえてきたのを聞きながら、ヴォルドへと視線を向ければ、こちらもどこかうつらうつらとしている。

「皇帝、寝るならレーンをベッドに運んで」

声をかけたことで眠りの淵から顔をあげたヴォルドの腕に、蓮を押し付ける。

大事そうに蓮を抱えながら、ヴォルドはゆっくりと頭を傾いで頷いた。

## 酒盛り後（後書き）

貰った酒ネタ…。

多分期待されてたのとは違うと思う。

蓮は酒飲むと幼くなります。

そして常以上の傍若無人になり、特定の人間にキス魔に…。

お姉さま（短文）（前書き）

前倒しでどうしても書きたい衝動にかられた。

よって時系列としては本編より少し未来。

まだ出てないキャラ有り。

ネタばれ

上記三つが大丈夫な人のみ、お読みください。

## お姉さま（短文）

パタパタと走って来る愛らしい少女に、アナクは大きく息を吐いた。

この国に来てすでに1週間近いが、なぜこうも懐かれたのかわからない。

女装か。女装のせいなのだろうか。と、未だにさせられている女装姿に、またため息が出る。

隣で優雅に紅茶を飲んでいるフィーリーシャ神の眷属である蓮は一貫して我関せずといった態度を崩さず、アナクは一人、やって来るだろう衝撃に軽く身構えた。

「お姉さま!!」

腰のあたりにタツクルをかまされ、衝撃を殺しながら受け止めると、緋色の髪を乱しながら少女が笑う。

手に持っていた籠から焼き立ての菓子を取り出して、アナクへと差し出しながら少女は自慢げに言った。

「お姉さま!今日はメルテ（クツキー菓子）を焼いたんです!食べてみてくださいな!」

悲しいかな、アナクには一切伝わらなかったが。

北の大陸、ロストパース大陸の南端に在るモーレ王国。

幸いにも島国であるためか、内陸で起こっている戦禍に巻き込まれず長閑な平和を保っているこの国で、蓮とアナクは表向き王女の客として滞在している。

王女とは、目の前にいる緋色の髪の少女だ。

王女というには大らか過ぎてどこか町娘のような少女は、手に持った菓子を掲げて、期待を込めた瞳でアナクを見ていた。

「…レーン様」

大陸が違えば言葉は全く違う。

喋る言葉も書く言葉も、この大陸に関しては全く知らないアナクは、困ったように蓮を見た。

その視線を受けて、蓮は面倒くさそうに動いた。

実際面倒なのだろう。

ガツと菓子の入ったバスケットに手を突っ込んで驚掴みになると、アナクの口に押し込んだ。

「んぐっ…！」

「お姉さま!？」

咽喉に詰まらせたアナクを眺めつつ、蓮はまた紅茶を飲みだす。声も出せず、マーンソンの迎えも来ない状況で、苛立ちが募っている蓮にとって、アナクへの態度は完全なる八つ当たりだ。

少女が、アナクが男だと知りながら女物の服を着せるのも、アナクに女装趣味があるのだと、蓮が誤解させたからだ。

そのおかげで、視覚的苛立ちは随分半減できた気がする、内心ほくそ笑んでいる。

「お姉さま！死なないで！…ああ、私が作ったメルテに毒が仕込まれていたなんて…！」

涙目でわたわたとしている少女に、アナクが咳きを堪えながらすまなそうに笑っている。

言葉が通じないからこそ微笑ましい光景に、蓮はぼんやりと紅茶を口に含んだ。

お姉さま（短文）（後書き）

ぶっちゃんやお姉さま！がやりたかったただけなんです。  
ごめんなさい。

星を歌う (蓮&ヴォルド) (前書き)

時系列でいえば13〜14話の間のお話

星を歌う (蓮&ヴォルド)

見上げる夜空に溢れんばかりの星が瞬く。  
青い青い星の光は、月明かりと見まがうほどの明るさがあった。  
その明るさに誘われるように、口を開く。  
小さく開かれた唇から漏れ出したのは、柔らかい旋律だった。

輝く夜空の 星の光よ  
瞬くあまたの 遠い世界よ  
更けゆく秋の夜 澄み渡る空  
臨めば不思議な 星の世界よ (「星の世界」川路柳虹/詩)

「歌、か？」  
視線だけ声の主に見ると、本から顔をあげてじっとこちらを見ていた。

ベッドの端に腰掛けているその人物ににじり寄りつて、隣にまで移動する。

「うん」  
手にしていた本を取り上げながら頷くと、仕方ないなと小さな子供を見るように頭を撫でられた。

その視線に、ふと思いついて聞いてみる。

「ね、この国の子守唄と違ってあるの？」

「子守唄…。そうだな、有名なのがあるが」

「どんなの？」

歌つてと催促すると、困ったように笑われた。

「他の誰かに歌ってもらってくれないか。私は…」

「なんで」

他の誰かと言っても、そう易々と頼める相手が思い当たらない。

それに今聞きたいんだと催促を繰り返すと、頭まで下げられて断られた。

「なんで」

もう一度理由を問うと、言いづらそうにこう言われた。

「人前で歌うのはやめた方がいいと、以前言われてな」

「…」

音痴か！

顔がよくても完璧じゃないんだなあと、改めて認識した。

認識した瞬間、ぶふつと吹いてしまい、バツの悪そうな顔で視線を逸らされる。

それがさらに笑いを誘い、腹を抱えて笑ってしまった。

「くくっ…、うん、ならいいや」

頼んでごめんねと肩を叩いて、なんとか笑いを引っ込める。

「……他にも何か歌はないのか？」

「んーそうだなあ」

他の歌、と言われ改めて考えると、流行りの歌しか思い浮かばない。

クラシック系の曲しか聞かないこの国でJ・popを歌う気になれず、さて何にしようと考えると、昔よく聞いた童謡が頭をかすめた。

通りゃんせ 通りゃんせ

ここはどここの 細道じゃ

天神さまの 細道じゃ

ちつと通して くだしゃんせ

ご用の無いもの 通しやせぬ  
この子の七つのお祝いに  
おふだをおさめに まいります  
いきはよいよい 帰りはこわい  
こわいながらも  
通りゃんせ 通りゃんせ (「とおりゃんせ」童歌)

「……肌寒くなるのは気のせいかな？」  
自らを抱きしめるように二の腕を擦られ、雰囲気だけで恐さが伝わるものなんだなと頷きながら同意する。

実際この歌、人身御供の歌だしね。  
子殺しの歌にゾツとしないのは当然だろう。

「こわい歌いっぱいあるよ？あ、人身売買の歌、歌ってあげようかな？」

「いや、いい」

「つまんないの……」

きつぱりと断られて、口をすぼめて窓の向こうに見える空を見上げる。

キラキラと瞬く空を視界に入れたまま、また小さく歌を口ずさんだ。

きらきらひかる お空の星よ  
瞬きしては、 みんなを見てる  
きらきらひかる お空の星よ (「きらきら星」武鹿悦子ノ詩  
フランス民謡)

二番の歌詞はなんだったかなと思いながら、本を読みながらメロ

デイーだけ口ずさめば、また優しく頭を撫でられた。

軽く笑みをもらせば、頭を撫でていた手が頬をくすぐるように――撫でて離れていく。

その手を追うように視線をあげれば、懐かしむような視線と合わさり、二人して小さく微笑みあった。

星を歌う (蓮&ヴォルド) (後書き)

この二人の無自覚なイチャつきは、契約とは関係ないんだぜっていう話

契約して顕著になっただけだったり

皇帝はヘタレに加え、音痴設定が追加されたもよう

バレンタイン小ネタ (蓮&マーノン) (前書き)

時系列無視ってる挙句に軽く本編に出てないネタばれ有り  
(2/14現在、本編は7月の終わりか8月初頭)

## バレンタイン小ネタ（蓮&マーノン）

先日ふと、今日が何の日かを思い出し、いそいそと用意した品をマーノンの前に引っ張りだした。

包装も何もなく、むき出しの本とも言えない本を押し付ける。

「なんで私が？とも思っただけど、いつもお世話になってるからこれあげる」

バレンタインのプレゼントだ。

チョコレートという選択肢も考えたが、マーノンに食べ物という発想自体が私の中になかったので自然と却下された。

「唐突だね。…スプラッタ写真集？」

仏頂面の私に嬉しそうに本を受け取り、中を見てマーノンの瞳に凜猛な色が灯る。

「正しくは画集。結構リアルでしょ？」

宮廷画家の人に頼んで描いてもらったのだ。

完成品を取りに行った時、酷く顔色が悪かったが、あの人大丈夫だったろうか。

そんなことを思い出していると、マーノンがページをめくりながら嫌な発言をした。

「うん。なんだか誰か殺したくてうずうずしてくるね」

「…おお。プレゼントの選択間違えた!？」

マーノンといえばこれかハグしか思い出さなかったからこれにしたけど…。

そうか、よくよく考えなくてもこれはヤバイ方向に刺激しちゃったか。

なんてことしてんだ、私！

「レーン、この間見つけたケータイとやらで写真集つくろうよ」  
「嫌だ」

何を言い出すんだと即答すれば、拗ねることもなくいつもの笑みに戻る。

「ケチだねえ」

「ケチで結構。誰が無差別殺人の片棒なんぞ担ぐか」

あと二つ用意したプレゼントを抱えながら吐き捨てれば、「画を見ながら今度はこんなことを言い出した。

「んー。じゃあ戦争がある地域でも行く？それならいいでしょ？」

「考えたな…。でも却下」

「なんで？」

「そもそも、ケータイで写真撮った後に何で印刷するんだ」

それ以前に、行きたくないというのが私の本音だけれども。

本音を知っていてか、人の悪そうな笑みをマーノンが浮かべる。

「リイに頼めば作ってくれそうだけど」

うん。

否定できないのがとても悲しい。

「……嫌だ。行きたくないー！！！！」

「結局行きたくないだけなんだね」

逃げようとする私を抱きかかえ、マーノンはそれ以上暴れさせないようにと抱きしめた。

往生際の悪い私はそれでも尚暴れ続けておりますが。

「悪いか！？」

「強制連行してあげようか？」

顔だけ振り向いて叫べば、全くもって笑っていない瞳とかち合った。

ヒイツと悲鳴をあげそうになったが、なんとか咽喉の奥に押し込む。

「断固お断りさせていただきます！」

「なんでー？」

「私は血腥いのは好きじゃないのー!!」

必要な殺人なら推奨するが、だからと言って血を見るのは好きなわけじゃない。

むしろ嫌いだ。

大っ嫌いだ。

そう泣き叫べば、マーノンは呆れたように腕を離した。

「最初っからそう言えばいいのに」

「うっさい」

少し乱れた服装を整えながら、さり気な涙目になっていたので涙を拭う。

もうこんな奴放っておいて、あと二つのプレゼントを届けようと背を向けたら、何やら不穏な言葉を落とされた。

「しょうがない、レーンがそこまで拒否するなら、ちょっとあそこらへんの動物でも狩ってこようつと」

「……っちょ、待て! その動物の中に人間入れんな阿呆!」

窓の外、庭を整備している男を見ながらにんまりと笑うマーノンの、あまりに獰猛で危険な肉食獣の表情に、マーノンが私の許可なしに人傷つけられないとか、そんなことはすっぽりと抜け落ちてしまつて、怒濤の勢いでマーノンに抱きついた。

「大丈夫! ちよーと弄るだけだから」

ニマニマと楽しげに笑つて私の頭を撫でながら、マーノンが言う。その時にはいつものマーノンに戻っていたけれど、そんなことも気付かずに、私は泣き叫んだ。

「弄るって何だ! てか全然大丈夫じゃねえよ、この馬鹿!」

誰でもいいからこいつを止めて! と、マーノンが冗談だと言つまで私は切に願つた。

バレンタイン小ネタ (蓮&マーノン) (後書き)

どうしてプレゼントくれるの?とかはマーノン気にしない。

バレンタイン小ネタ2 (蓮&ヴォルド) (前書き)

マリーノン編同様、時系列無視ってる挙句に軽く本編に出てないネタばれ有りです

## バレンタイン小ネタ2 (蓮&ヴォルド)

突然部屋に訪れた蓮が、ずんずんと歩み寄ってきたかと思えば、机の上に可愛らしく包装された小さな箱が置かれた。

「ヴォルド、これあげる」

えへへと照れたように笑う蓮は愛らしく、ヴォルドも小さく笑みを浮かべて箱を手にとる。

ふわつと香ってきた甘い香りに、中身が何かを知った。

「…これは、レッタか？」

「うん。チョコレートはなかったから、似たので代用した」

「ちょこれーと？」

時折蓮が口にする聞き慣れない言葉の類だろうかと、口の中で重複すれば、今日の日付が記されたカレンダーを指差して蓮が言った。

「今日2月14日でしょ？私のいたところじゃ、日ごろの感謝を示す日なのよ」

「ほお」

つい先日も節分だと豆まきなるものをさせられたことを思い出したヴォルドは、蓮がイベント好きなのだと認識した。

実際のところは、叔母である加奈子に付き合わされて習慣化してしまっただけなのだが、蓮としても嫌いではないのであながち間違いいではない。

「まあ、感謝より、愛をささやく日って感じだったけど」

だから手作りが多いし、それも手作りだけどねとさらりと言われ、愛という言葉に思わず貰ったレッタをマジマジと見てしまった。

「…毒入りか？これは」

「なんでだよ」

間髪いれずに不機嫌そうな声を返され、ヴォルドは嫌がらせでは

なさそうだと安堵した。

ヴォルドからしてみれば、蓮がヴォルドに愛をささやくというのはどうにも想像できない。

というより、これまでの行動を鑑みれば、今までの報復に毒を盛られていてもおかしくはないのだ。

「いや…」

当の本人である蓮がその気はないのだから、蒸し返すことはしなけれども。

言葉を濁したヴォルドに、少々納得いかなそうな顔をした蓮だが、さして尾を引くこともなく、説明を続ける。

「…本来は本とか花束とかだけど、私の国じゃチョコレートっていうお菓子が主流だね」

「それでレッタ…」

チョコレートが如何なるものかは知らないが、多分レッタに近い菓子なのだろう。

「そういうこと。チョコは甘いけど、レッタは苦いから、ヴォルドにちょうどいいと思って」

「ありがとう。あとで頂こう」

休憩の時に味あわせてもらおうと、礼を言えば、蓮が悪戯っ子の子供のように笑った。

「お返しは3月14日に3倍返しで」

「……日ごろの感謝だということに見返りを求めるのか？」

それは感謝とは違うんじゃないかと半目になれば、鉄則なのだと返される。

「バレンタインに貰ったら、ホワイトデーでお返しを。これ絶対！」「ばれんたいん？」

「2月14日をバレンタインデー、3月14日をホワイトデーっていうの」

「…そうか」

蓮のいた世界には、よくわからないイベントがあるものだと軽く

呆れた。

「そう！だからお返し期待してるねー」

お返し、といわれて、ヴォルドは押し黙った。

蓮にお返しということは、何かプレゼントをということだ。

蓮にプレゼント…。

「ヴォルド？」

急に黙ってしまったヴォルドに、蓮が首を傾げる。

「いや、レーンは何がいいだろうかと考えたら、何も思いつかなくてな」

「1ヶ月あるんだし、ゆつくり考えればいいよ」

それもそうかと頷いて、ヴォルドは蓮を見る。

「わかった。…では3月14日は戻ってくるのだな？」

最近ヴィレンツアーレから、蓮がいなくなることも多い。

お返しをとすることは、その日にはここににいるということかと問いかければ、苦笑いを返された。

「……あ、考えてなかった」

ならないかもしれないということかと、考えていたプレゼントの候補から真っ先にナマモノを消した。

「では菓子類はやめて日持ちするものにしておこう」

取っておくことができない訳ではないが、一度出て行ったらいつ帰ってくるかもわからない蓮だ。

食べ物その他になにかいいものがあつただろうかと、ヴォルドが考えていると、机に頬杖をつきながら、蓮が嬉しそうに頬を緩ませる。

「…服とか宝石って言わないあたり、私の好みを理解してるよね」

好みを理解しているというより、散々他者からの贈り物に対して晩餐で愚痴られたからだ。

元より、邂逅時でのフィーリーシャ神とのやり取りで、華美なものには好まないだろうこともわかっていた。

それ故に、ヴォルドから蓮に贈ったものといえば、ここでの滞在用にと服をこさえたくらいだ。

「それでもいいが、どうせ部屋に置き去りにされるのだろう?」

拳句贈り甲斐のないことといったらないので、候補には上がりようがなかった。

「そりゃあ、荷物になりますから」

「ならば贈ったところで無駄ではないか」

「……華美なものじゃなければ、1個くらいつけなくてもないけど」

一瞬、何を言われたのか理解できずに、蓮の顔に食い入るように視線を向ける。

それに顔を真っ赤にして、合わさった視線を逸らされ、慌てた様に蓮は部屋を出て行った。

「じゃ!」

走り去っていく蓮の足音を聞きながら、ヴォルドは熱くなった顔を右手で覆った。

「……………耳飾りでも贈るか」

蓮はどんな顔をして受け取るのだろう。

そんなことを思いながら、贈る耳飾りのデザインを考え始めるヴォルドだった。

バレンタイン小ネタ3 (蓮&フリーリシャ) (前書き)

時系列軽く無視ってます

### バレンタイン小ネタ3 (蓮&フィリーシャ)

「リイー。これあげる」

持っていたモノを押し付けると、その大きさにフィリーシャは体を少し逸らして抱きかかえた。

「…これはなんだ？」

「デディベア！くまのぬいぐるみだよ」

私の胸に満たない身長のフィリーシャが、特大デディベアを抱きかかえる姿はもの凄く可愛くて、しまりのない顔になるのを止められない。

ああ、可愛い。

「くま…なのか」

怪訝そうに、これが…くま？と眺めるフィリーシャに、私の知るくまと違っただろうかと不安になった。

「お気に召さない？」

「いや、愛らしいくまなのだな  
ふむ。」

花柄の布を使ったせいかな？

確かに、花柄のくまは、この世界にでもいなさそうだ。

「そりゃあぬいぐるみですからね」

「レーンが作ったのか？」

肌触りは気に入ったのか、嬉しそうに頬ずりする姿に抱きしめたくなった。

「うん。貰いものの服かつさばいて、作ってみた」

奇妙なほど、ピタリと、フィリーシャが動きを止める。

恐る恐るといった様子で視線を向けられた。

「…レーン、それはもしかや先日贈られたドレスのことか？」

「え？うん。そうだけど」

何で知ってるんだらうと頷けば、氣落ちしたようにぬいぐるみに顔を埋めてしまった。

「……そうか」

ぎゅうつとぬいぐるみを抱きしめ、肩を落とすフィーリーシャに、私は首を傾げるしかない。

「どったの？」

けれどフィーリーシャは答える気はないのか、にっこりと嬉しそうにぬいぐるみを抱いた。

「いや、何でもない。このくまは余が貰っていいのか？」

「うん。リイのために作ったから」

そう言つと、フィーリーシャはパツと顔を輝かせた。

「っ！そうか！ありがとうレーン！」

「いえいえ。喜んでもらえて何よりだよ」

ある意味一番手間だったのはそのデイベアだ。

上質の布は扱いが難しい。

縫おうとして布がつれることもしばしばあつて、悪戦苦闘したのだ。

「レーン！レーンは何か欲しいものはあるか？」

嬉々として訊ねてくるフィーリーシャに、私は苦笑しながら首を横に振つた。

「んー。特にはないかな」

私が欲しいのは、兄を目覚めさせることのできる王。ただそれだけ。

フィーリーシャもすぐにそのことに気付いたのか、また肩を落とした。

「…そうか」

何かお礼がしたいのだからと、消沈とした声に言わる。

「そんなに喜んでくれたなら、来月の14日に、何か頂戴？」

「来月…？」

「そう。来月」

元々これはバレンタインの贈り物だ。

やはりお返しはホワイトデーがいいと領けば、フィーリーシャは不思議そうに眼を瞬いた。

「何かとは、何だ？」

「そこはリイが考えて。何でもいいよ」

「うむ…」

難しい顔で考え込むフィーリーシャに、ふとあることに思い至ってすぐさま条件を追加した。

「あ、何でもって言ったけど、小さいものね！お花とか、本とか、そういうの！」

神様なフィーリーシャだ。

何でもなどと軽はずみなことを言っで、とんでもないものをお返しされてはいただけない。

「余が考えればいいのだな？」

わかってるのかいないのか、そんな返答にもうなるようになれと同意した。

「うん」

「わかった！では来月を楽しみにしておれ！」

「うん。楽しみにしてるね」

意気揚々と来月に思いを馳せるフィーリーシャを見ながら、どうかまともなものでありますようにと、私は願った。

バレンタイン小ネタ3 (蓮&フィリーシャ) (後書き)

ほのぼの。いいね、ほのぼの。

イメージは保母さんと園児的な。

因みに、ドレスはフィリーシャがこっそり贈った物。

ホワイトデー小ネタ1 (蓮&フリーリャ) (前書き)

バレンタインの続き

## ホワイトデー小ネタ1（蓮&フィーリーシャ）

「レーン！」

駆けよってくるフィーリーシャの姿に、何でこいつは走る時は裾に足とられないんだろうと思った。

歩こうとすると相変わらず裾に足とられてすっ転ぶくせに。

いや、それより…。

「…何してんの、リイ」

その手に持っている物はなんだとは聞けず、遠回しに聞いてみれば、無邪気な答え。

「ほわいとデーだ！」

ホワイトデー…。

ホワイトデーっていうと、うん。

「……………まさかと思うけど、それがお返し？」

「何かおかしいだろうか」

「うん。…おかしい」

不思議そうに手にしている物を見つめるフィーリーシャに、きつぱりと断言した。

おかしいとか以前の問題なのだが。

というより、それを選んだのは嫌がらせか？

「そ、そうか…」

落ち込み始めたフィーリーシャをうざいと思いこそすれ、慰める気はさらさらなく、読んでいた本に視線を落としながら言った。

「だってそれ、ウェディングドレスだよな？私の世界の」

「ほわいとは白という意味なのだろう？」

「白繋がりかよ！」

まさかの発想に思わず突っ込んでしまった。

何か？

この世界でも白は挙式用のドレスだったか？

…あれ、この間黒って聞いた覚えが。

「レーンの世界では、白といえばウェディングドレスなのだと聞いた！」

……なるほど。

「…誰と結託したのかよくわかるよ。その話したのマーノンしかないねえ」

白って言えば何思い浮かべる？なんて聞いてきたマーノンの魂胆がここにあったとは…。

白で加奈子さんのウェディングドレス思い浮かべちゃったのが運の尽きか。

「まさか違うのか？」

「いや、ある意味そうだけど。着ないよ？」

何がどうして私がスカート類を着用しなければならないんだ。死ねばいいよ。

もうほんと、マジで。

「……ふぐつ。うえつく」

「泣くな！」

本来ならば庇護欲をそえられるのだろうその泣き顔も、今は嘘くささしか感じられない。

「せ、せっかく用意したというのに」

「私にスカート類着させようなんぞ、100万年早いんだよ！」

100万年経とうともスカートなんて絶対着ないけどね！

兄と加奈子さんに懇願されることがなければ、だけど。

そんな心の声が聞こえたのか、フィーリーシャがじと目で睨みつけてきた。

「何」

「レーンはいけずだ」

「だつたら何だ」

今さらだと顔を顰めれば、フィーリーシャは得意げな顔で持っていたドレスの下からあるものを取り出した。

「ではこれもいらぬな」

これ見よがしに見せられたそれに、慌てたのは私の方だ。

「…え？つちよ、それ！」

この世界に來た時に失くしてしまったと思っていた、兄が別れ際に作ってくれた押し花のしおりだ。

「捨ててしまおう」

「待て！」

何故それをフィーリーシャが持っているのかは知らないが、捨てられてなるものか。

兄がくれたものだというのに！

「…どうかしたのか？レーン」

くそつ、フィーリーシャがマーノンに見えるのは気のせいかな？

気のせいなのか？

「………着ればそれくれる？」

屈服した気分で悔しいが、これであのしおりが戻ってくるなら安いものだ。

「あげてもよいぞ？」

清々しいまでの笑みをぶん殴りたいけど。

「その笑顔が気に食わないけど…背に腹は代えられない。誰だよりイに知恵つけたの」

…考えるまでもなくマーノンだな。

うん。

「ふふふふつ。レーンのドレス姿…！」

気持ち悪い笑いでフィーリーシャは飛び跳ねていた。

もうホント、死んじゃえばいいのに。

ホワイトデー小ネタ1 (蓮&フリーリィシャ) (後書き)

リィの逆襲…？

こっそり贈ったドレスをデイベアにされたから、どうやって蓮にドレスを着せようか1ヶ月画策したんだよ、マーノンと一緒に

## ホワイトデー小ネタ2 (蓮&マーノン)

「ずいぶん可愛い格好してるね」

裾の長い純白のドレスを引きずりながら歩いている蓮を待ち伏せていたマーノンは、蓮のドレス姿にやっぱり白が似合うなと内心とても満足していた。

ドレスを着ているために機嫌が急降下して、眉間にしわを寄せている蓮も可愛いといつものように抱きしめる。

「うっさい」

うざつたいと言わんばかりに押し退けられても、マーノンは気にした様子もなく懷から箱を取り出す。

「うん。これもあげる」

「…何」

頭に何かしらの感触を覚えたのだろう。

怪訝そうに頭にやろうとしていた手を握り、出来栄を見やって可愛さ倍増だとうつとりと蓮を見る。

「ティアラ。うん、可愛い可愛い。花嫁さんの出来上がりだね」

何言っただこいつといった感情がありありと見て取れる表情も、今は可愛い要素になるのだからマーノンの思考回路が如何に残念かが窺える。

「皇帝に見せるのもったいないから、これからデートしようか？」

言っただけに言うお姫様だつて抱き上げられたが、だらしない顔でへらへらとしているマーノンに逆らう気にもなれず、蓮はされるがままになりながら問い掛ける。

「マーノンと？」

「うん」

さあ行こうといいそうなマーノンとは反対に、冷淡とも言える無表情で蓮は抑揚もなく言った。

「やだ」

「なんでさ」

「空中散歩とか言い出すにきまつてる」

なんでわかつちやうかなあと残念そうに肩を落とすマーノンに、蓮は自らの勘が外れていなかったことを知った。

「凶星かよ！」

「その格好で涙目上目遣いだと迫力が増すかなあつて」

「何の迫力！？」

「あ、破壊力のがいい？」

色気とかかもし出したら無敵だよねと訳のわからないことも付け加えられ、蓮はコイツは馬鹿だと本気で思った。

「意味わかんねえ！」

「そうだ。お化粧もしょうか？」

「しない！」

いいこと思いついたとでも言いたげな提案も蓮は即座に一蹴した。これ以上付き合つてられるかと暴れ出した蓮を抑えつけるように抱きしめながら、マーノンが笑う。

「なんで。もつと可愛くなるうよ」

「ならなくていい！」

「そんなんじゃ皇帝に愛想尽かされちゃうよ？」

「だから？」

そもそもあのヴォルドに尽かせるような愛想があるのか。

真剣にそう返されて鼻白んだマーノンは、ならばと対象を変えた。

「…神子に愛想尽かされちゃうよ？」

「……兄さん起きてくれないかな。女装で起きるんなら、いくらでもするのに」

私がお嫁に行ったら泣いて起きてくれるかな！？なんて言い出す始末に、何故だろう、もの凄くいらつとしたマーノンは、今までの

高揚とした気分が嘘のように機嫌が悪くなった。

胸糞悪さに吐き気まで覚え始める。

「ん？どうかした？怖い顔して」

「…なんでもない。とりあえず化粧しようねー」

こうなったら今以上にとびつきり可愛いレーンに仕立てあげて、皇帝のところに送り込もう。

そう決心して、マーノンは蓮を抱き上げたまま蓮の部屋へと飛んだ。

「テメエ！離せ馬鹿！ーーーー！！！！！！！！！！」

いつもの如く、蓮の叫びは聞こえないものとして虚しく響くだけだった。

ホワイトデー小ネタ2 (蓮&マーノン) (後書き)

兄主義の蓮にマーノン不貞腐れ。

マーノンからのお返しは、ティアラと化粧。

でもどっちかっていうとこれ、蓮にっというより皇帝にだよねあ…。

### ホワイトデー小ネタ3 (蓮&ヴォルド)

「……」

やってきた蓮の姿に、ヴォルドは目を見開いたまま微動だにせず、じつと魅入った。

「…何」

向けられる視線に居心地の悪さを覚えて、蓮は不貞腐れた様にふくれっ面をする。

それにふつと顔を綻ばせながら、ヴォルドは立ちあがって蓮の前に立った。

「随分と愛らしいな。レーンは白がよく似合っている」

「毎度思っただけだよ。ヴォルドの女嫌いの基準がわかんない」

艶言でも語りだしそうな甘い表情に、こいつは本当に女嫌いなのかと蓮は疑いたくなった。

しかしヴォルドは、笑みを深めて白いグローブに覆われた蓮の右手を取りキスを落とす。

「そうか？レーンとそれ以外で、明確ではないか」

「……………つつっ」

顔に熱が集中するのを蓮は自覚せざるを得なかった。

ヴォルドの行動と言動に他意はない。

だからこそ多大な羞恥を覚えてしまい、蓮は何も言えなかった。

「どうした」

赤面して閉口している蓮の顔を心底不思議そうにヴォルドは覗き見る。

その仕草にさえ過敏に反応してしまいそうになり、蓮は顔を背けた。

「口閉じようか、ヴォルド」

「何故？」

真面目に問い返されて、なんともいえない脱力感が蓮を襲い、馬鹿らしくなった。

「…もういい」

「…そうか？ああ、それでな。先月バレンタインのチョコレートなるものをくれただろう？」

力が抜けた様に項垂れる蓮を心配そうに見ながらも、ヴォルドは机の上に置いた箱を手にとった。

「ああ、うん」

「そのお返しなのだが」

手のひらサイズの箱を蓮に手渡す。

味気ない紺色の箱に、装飾の類は一切ない。

今日出来上がったばかりだからだ。

「これ？開けていいの？」

期待したような瞳を向ける蓮に、ヴォルドは淡く笑みを浮かべ頷く。

「ああ」

そつと大事そうに蓋を開け、中から姿をのぞかせたそれに、蓮の瞳が輝いた。

「……イヤーカフス？」

箱の中の銀色のそれを指で撫で、感触を確かめるように形をなぞっていく。

「受け取ってくれるか？」

「それは…うん」

バレンタインの時に装飾品でもいいと言ったのは自分だものと頷く蓮に、ヴォルドは安堵したように肩から力を抜いた。

「よかった」

柔らかく笑うヴォルドに笑みを浮かべ、蓮は手にした壊れ物でも扱うようにゆっくりと持ちあげる。

窓の外から流れ込んでくる光に透かした。

宝石の類は一切なく、彫刻の模様だけのそれは光に透かした途端、青く光った。

「この模様……」

見たことのある模様に息を呑む。

「契約の紋章だ。気に入らなかったか？」

「ううん。綺麗……」

この世界の、絆の象徴。

ヴォルドとの絆。

それが契約を交わした時のように青く光るそれは、涙が滲むほどの感動を覚えて、蓮は知らず恍惚とした表情を浮かべていた。

ぎゅっとけれど柔くそれを握りしめて、パツと笑みを浮かべてヴォルドに礼を言う。

「ありがとう、ヴォルド！」

「いや……」

「ちゃんと身につけるね！」

「それは、是非とも」

身につけてもらえるなら作らせた甲斐があると頷けば、そんなヴォルドの返答も耳に入らない様子で、蓮はすでに部屋から出ようと駆けだしていた。

「ちよつと待ってて、今つけてくるから！」

蓮がいなくなったのを見送りながら、口もとを片手で押え、ヴォルドは顔を赤らめた。

「……………あの顔は反則だろう」

艶のあるけれど純粋な穢れを知らない色の、華のような笑顔。

伸ばしかけた左手を握りしめ、大きく息を吐くヴォルドに、蓮が出て行ったあと入ってきたアナクは、またやってんのかと生温い視線を向けた。

ホワイトデー小ネタ3 (蓮&ヴォルド) (後書き)

神様二人からお膳立てされてるというのに、手も出せないヘタレ皇帝

3月にはこれが当たり前と化している模様

拍手の時はこれで終わりでしたがあと1話あります

おまけ (フイーリーシャ&マーノン) (前書き)

とりあえず、ネタばれ嫌な人は回れ右願います

これは本編に出るまで知りたくなかった…！なんて後悔しそうな方  
読んだ後の苦情は受け付けませんのでご注意ください  
ついでに短いです

## おまけ (フリーリーシャ&マーノン)

「やはりな…」

「もう放っておくことが一番だと思うけど」

ドレスを着ているということもすでに気にしていなさそうな蓮を窓の外から遠目で眺めているのは、フリーリーシャとマーノンだ。

「レーンは結婚とやらをすべきだ」

「もうすぐ子供だつて産まれるから？」

「そろそろだと思ふのだがなあ」

契約での絆だけでなく、蓮とヴォルドが好きあっているのは誰の目から見ても明らかだ。

ただし、好きという定義にのみ当て嵌めて満足している二人が、恋人以上の関係には全くもってなれていないが。

「無事に生まれてくれればいいけどねえ」

貰ったイヤークラスをつけて、ヴォルドの下に駆ける蓮の腹は大きく膨らんでいる。

卵ではなく、人の形で産まれてくるのだ。

この世界では史上初の出来事だろう。

「レーンは小さいから心配だ…」

「そう、だね」

卵を産むのとは訳が違う。

人の形をした赤ん坊を産む。

そんなものは見たこともなければ聞いたこともない。

人であろうと神であろうと、この世界には存在しえない知り得ることのない、未知の領域。

あんなにも小さな体を持つ蓮が、子供など産めるものなのか。

ヴォルドたち人間だけでなく、フィーリーシャたち神々ですら予見することは難しい。

「あ、リイ！マーノン！お茶にしよう？」

部屋の中から手を振って声をかけてくる蓮の笑顔は、常よりも柔らかく愛らしい。

それはきつと、窓から乗り出す蓮を危ないからと支えるヴォルドのせいだろう。

「人間はわかんないや」

互いに微笑み合う甘やかな雰囲気は、人間たちという恋人らそのものののに、当の二人は友人以上恋人未満の関係を崩さない。

「子供が生まれたら楽しみでもあるがな」

「どう変わるかは確かに」

「レーンは、幸せになれるだろうか」

ヴォルドと茶会の菓子を選んでいる蓮の顔には笑顔が絶えない。

このまま、蓮が幸せになればいい。

「幸せに、するんだよ」

あの笑顔を絶やさせないためにここにいるのだ。

マーノンの真摯な言葉に、フィーリーシャは軽く瞬きをして、小さく口の端を緩めた。

「リイ！マーノン！」

再び呼ばれ、今行くよとマーノンが手を振った。

おまけ (フリーリーシャ&マーノン) (後書き)

蓮は卵じゃなくて子供を産みます。

妊娠期間は若干長め…かな？

どうなんだろう、数えてないからわからない(爆

## 例えばこんな終わり（前書き）

一章17話前後で少しだけ考えたバッドエンド（死にネタ含みま  
す）

過程をすつ飛ばして終わりだけ

契約後、妊娠設定なし、皇帝と蓮が恋人関係であったと前提  
本編でこの終わり方はありませんのであしからず

## 例えばこんな終わり

「ねえ、レーン。レーンが欲しい物はなんだったっけ？」

ほしい、もの。

ほしいとおもったもの。

そんなの、決まってる。

この世界に来てまで欲したのは。

「兄さんの、幸せ」

どうしてとかなんでとか。

そんな些細なことをすつ飛ばして、まるでそれが絶対みたいに、私はそれに手を伸ばした。

だって、兄さんが幸せでないと、私は…。

「ねえ、レーン。目の前に見えるものはなんだろうね？」

笑みを含んだささやきに、私は虚ろに首を振った。

見たくない。

視界に入れてはいけない。

見てはいけない。

強く瞑った瞼も、両手で塞がれた耳も、マーノンの前では何の意味を持たない。

「そろそろ現実を見ようか、レーン」

「…っ、私は！」

「レーンが一番好きな人は誰？」

一番、好きな人。

唐突な問い。

意味のある問い。

その答えは、私を壊す。

「すきな、ひとは……」

太陽みたいに綺麗な金髪と空のように澄んだ青い瞳の…。

私に触れて、抱きしめて、ただ傍にいたいことを望んでくれた人。最新まで、私を愛してくれた人。

「ヴォルド」

私を守り、囲っていた世界が、音を立てて砕ける。

鬱蒼とした森の、神殿の中。

十字の石碑が立つ庭で、私は茫然と座り込んでいた。

石碑に刻まれた名は。

「兄、さん……」

10年前、召喚されたのは私。

神子だったのは私。

兄さんは…。

「兄さんは、もう死んでた」

死んでた。

けれどこの世界から、兄はすぐに弾かれた。

その遺体すら埋葬することも出来ず、私は泣いて、絶望して、フ

イーリーシャに理不尽な怒りをぶつけた。

フィーリーシャのおかげで私は助かって、生きてて、それが一層

自己嫌悪に拍車をかけて、死にたくなって。

眠りについたのも、私。

「お帰り、レーン」

後ろから抱き寄せられて、体が強張る。

マーノンの腕の中、その温かさに私は泣いた。

「レーン」

一瞬にして、すり替わった景色は、先ほどと殆ど変わり映えはしなかった。

変わったのは、石碑に刻まれた名前だけ。

「これが、レーンが望んだもの？」

違う。

違うんだと、私は首を横に振るしかできない。

どう否定したところで、これは私が招いた結果だ。

頑なまでに兄の幸せを追い求めて、それ以外を顧みなかった結果。どこからが夢で、どこからが現実だったのか、私は知らない。

それでも、ヴォルドと共に過ごした時間は本物で、そして、有りもしない兄の幸せだけを追い求めた私は。

「ヴォルゲルド・フィーシェーラ・ケアトラフェス・ヴィレンツァーレ」

石碑に刻まれた名を私は宝物を抱きしめるように囁いた。  
もう戻ることのない、大切な人の真名を。

## 例えばこんな終わり（後書き）

過程がないと暗さも半減だ。

この話だと蓮は悉く大切な人を失う。

この時点でマーノンも実は瀕死の状態だったり。

完全なはないにしてもハッピーエンドがいいなあ

## ワンシーンパロ（蓮&ヴォルド）（前書き）

白鳥 伝のワンシーンパロ

本編のストーリーとは何ら関係ございません

突っ込みどころ満載なので、スルー出来る方のみどうぞ

## ワンシーンパロ（蓮&ヴォルド）

「レーン？」

現れたその存在に、ヴォルドは眩しそうに目を細めた。

その、安堵したかのような表情に、蓮はもの言えず見入った。

肌着の白いシャツのまま、剣を片手に立つヴォルドは、自らに言い聞かすように繰り返した。

「レーン」

愛おしそうに、慈しむように、呼ばれる名前。

彼は手を伸ばし、けれど途中でその手を止めた。

困ったような苦笑をもらし、ひっこめる。

その一連の動作に、蓮はすでにわけがわからなくなった。

けれど、自らの目的を果たすべく、腰にさしていた短剣を引き抜く。

「レーンが来るとは、思わなかった」

「どうして？ マーノンが来るとでも？」

人間同士の事に、マーノンが手を出すわけがない。

それに、今回は手を出さないよう、蓮はきつく言い含めてきた。

「いや……。そうではない。来て、欲しくなかったただけだ」

疲れた様に眼を閉じて、ヴォルドは岩に寄りかかる。

剣を支えにして立っているのがやっとだった。

「今のヴォルドなら、私でも容易く殺せそうね」

マーノンから貰った短剣でなくても、心臓を一突きすることは容易そうだと、ヴォルドへと歩み寄りながら蓮は思った。

「レーン？」

不思議そうに瞬くヴォルドに、蓮は隠し持っていた短剣を突き刺

す。

ずっぷりと肉の裂ける感触を短剣越しに感じながら、蓮はきつく目を閉じる。

それから、目を見開いて、**ヴォルド**を見上げた。

考慮していなかった身長差から、心臓を狙った短剣は大きく逸れて脇腹へと突き刺さっている。

「それではだめだ、レーン。ここを突き刺さなければ」

「ヴォルド？」

苦しく喘ぐ息の合間から、心臓を指し示してヴォルドが囁く。

「殺して、くれるのだろうか？」

がくぜんと、蓮は息を飲んだ。

後ずさった反動で、短剣が引き抜かれ、鮮血が飛ぶ。

顔を濡らしたその血の温かさに、手をやりながら、体が震える。

「あ」

出来ない。

そのことを自覚する。

出来ない。殺せない。

血の生ぬるさに身が竦む。

「うん」

一歩、また一歩と後退する蓮に、ヴォルドは傷口を抑えながら慌てた。

蓮の背後にあるのは、海へとつながる崖だ。

「レーン、待て……！」

「うそ……なんで？　なんで、にいさんのためなのに。にいさんの……」

「レーン！」

上ずったヴォルドの叫びも届かない。

蓮はそのまま崖の外へと足を踏み出す。

「レ——ッ！……ッ！……ッ！……ッ！……ッ！」

落ちた少女は青い海の底へと没われた。

## ワンシーンパロ（蓮&ヴォルド）（後書き）

勾玉三部作を読み直してたら書きたくなった

前後のストーリーや蓮がどうして皇帝殺せなかったのかは好きに補完してください

## はぶいた話（前書き）

時系列は一章10話後

11話以降との本編の内容と矛盾する点もあるかもしれません

## はぶいた話

舞踏会というのを初めて目にして、抱いた感想と言えば「凄い」だった。

何がってそれは勿論、くるくると踊る人たちがだ。

見たこともない変な形の楽器が奏でる、どちらかといえばクラシック系の中でも軽やかな音楽に合わせて、階下の人たちがくるくると踊る。

女性のドレスがまるで花が咲くみたいにふんわりと広がるのが、とても綺麗だ。

色とりどりで花畑を見渡している気分になった。

「よくあんな風に踊れるなあ」

踊りはからつきしな私にとって、踊れるというだけで尊敬モノだ。

あ、でもマーノンとなら踊れるようになったものな。

…マーノン限定ってのがなんか悲しいけど。

しかも微妙にテンポ外してるって最後の最後までマーノンに言われたし。

「…はあ」

「気分でも悪いのか、眷属殿」

不機嫌にも見える仏頂面な無表情を引っさげたヴォルドに問われ、首を傾けた。

「え？何が？」

「溜息を吐いただろう。顔色も悪いようだが」

「あー。いや、高いところ苦手なもんで」

足場がしっかりしているとはいえ、恐いものは恐い。

確かにテラスから見下ろす舞踏は綺麗だし、見ていて飽きないけ

ど、これはテレビで見たいもので、生で高いところから見下ろすのは流石にそろそろ限界だ。

体から血の気が引き始めていて、今にも貧血を起こしそうだ。

「何故それを先に言わない」

咎めるように言われ、強い力で腕をひかれた。

いきなりのことに驚いていると、そのまま抱き上げられる。

「へ？ やっ、ちょっと!？」

声をあげた頃にはすでに廊下で、ますます困惑する。

なんで私はヴォルドに抱き上げられてるんだ!？

運ばせるにしたってそこにいる従者さんとかに任せるのが普通じゃないの!？

皇帝直々に運ぶようなもんじゃないでしょ!

ていうかどこに行く気だろうか。

あーていうか高い。

下を見た瞬間くらくらしてきた。

さっきより低いけど高いよ、ヴォルド!

アンター一体何センチあるんだよ! あーもう!

自棄になってヴォルドの肩に抱きつくように顔を埋めた。

抱きついた瞬間ヴォルドの身体が強張ったように感じたが、私はそれどころではない。

真っ暗になった視界の中で、ようやく安堵の息を吐いた。

視界が遮られてしまえば、感じられるのは歩くたびにゆらゆらと揺れる振動と、服の上からも感じられる体温のふわふわとした心地よさ。

「ねむ…」

ここ数日あまり寝ていなかったこともあってかなりの寝不足だった私は、心地良い睡魔に抗えずにそのままヴォルドの肩につつぶすように眠ってしまった。

## sideヴォルド

真つ青というよりは白い顔をした少女の言葉に、ヴォルドはすぐさま部屋へ返すことを決めた。

これが他国の姫などであれば誰かに呼べば事足りるが、眷属である少女相手ではそれも気がとがめた。

“フィーリーシャ神の眷属”という存在を未だにはかりかねていたのだ。

神として扱うには気安すぎ、人として扱うには尊いすぎる。

神子であれば相応の対処のしようもあるが、眷属ともなればまた扱いも変わってくる。

そもそも人型ではなく人であるということがヴォルドの判断を狂わせていた。

「へ？やっ、ちょっと!？」

一人返してもいいが、この顔色の悪さでは途中で倒れるだろうと瞬時に考えたヴォルドは、少女の小さな体を抱き上げた。

思っていた以上の軽さに眉を顰めながらも、廊下をつき進む。

この重さは10かそこらの子供の重さではないか。

眷属であるからこれほどまでに身軽なのか？

いや、人型の精霊だってもう少しあつたはずだ。

この少女は食事はちゃんとしているのかと不思議になった。

夕食は共にしているから食べているのはわかる。

では朝と昼はどうなのだろうか。

後で聞いておくかと考えていると、少女が肩口に顔を埋めてきた。少女のさらりとした黒髪が首筋にかかり、思わずヴォルドの体は強張った。

気にせずそのまま歩いていると、今度はすうすうとした息が耳元を撫でる。

「…寝たのか」

この体制で眠れるものなのかと呆れながら、ヴォルドは少女を部屋まで送り届けた。

不思議と感じなかった嫌悪感に、内心首を捻りつつ、少女の安穩とした幼子のような寝顔に小さく微笑む。

頬にかかる髪を払い、優しく頭を一撫でしてから、ヴォルドは広間へと戻って行った。

## はぶいた話（後書き）

こっから恋愛に発展してもよかったよね、ヴォルドは。  
と、（ルーズリーフの下書きを）発掘したとき思った。

蓮&加奈子（元・拍手お礼）（前書き）

蓮12歳時

蓮&加奈子（元・拍手お礼）

「蓮ちゃん蓮ちゃん、これ着て見ない？」

仕事から帰ってきた加奈子さんの手に握られた紙袋の束に、私は夕食を作っていた手を止めた。

「……また服買ってきたの？」

「うん！」

これ可愛いんだよ！と嬉々として服を取り出し始めるその姿に、重々しく溜息を吐く。

ああ、これで一体いくらの出費なんだろうかと、私の頭はすでに計算を始めていた。

「………当分はいいって言ったよね？」

合計で2万か。結構な出費だなあ、おい。

この間旅行するから節約しなきゃねとか言っていたのはどこ誰だったか。

「でも蓮ちゃんに似合いそうだったから！」

「いいって言ったよね？」

稼いでいるのは加奈子さんだが、私に対しての無駄遣いは奨励しない。

ということが強めにといかければ、加奈子さんは服を握りしめてしよぼくれ始めた。

「……うー」

「言ったよね？」

「だってえ……」

「だってじゃないでしょ」

涙目で見たって許しません。

「ご、ごめんなさい…」

とか言いながら、まだ買ってくるんだろうな、どうせ。行動パターンはもう見え見えだから、呆れるしかない。

「もう買つてきちゃったからしょうがないけど」

何か買わせないためのいい方法は無いものか。

そんなことを考えている私を前に、加奈子さんはさあ試着をと言わんばかりにずずいと服を押し付けてくる。

「蓮ちゃん！」

…そうだ。

「冬物が店に並ぶまでにまた服買ってきたら、加奈子さん夕食なしね」

「ええ！？」

「当然でしょ。まったく、また無駄遣いして」

「無駄遣いじゃないよ！」

加奈子さんのお金だからね、どう使おうと勝手だけど。

でもね、限度って言うものがあるのよ。

「無駄遣いでしょ。何着買ったと思ってるの」

「えーつと10着…くらい？」

「それ入れて17着！去年のも着回せるから買ってくるなって言ったのに！」

クローゼットに入りきらなくなるような服の買い方してどうするの！

「ご、ごめんなさいーい！」

「そういうわけで、今後冬物並ぶまでに買ってきたから加奈子さんの夕食作らないから」

加奈子さんの嫌いなコンビニ弁当か、外食で凌いでね。

そう言えば、加奈子さんは本格的に泣きだし、私に抱きついてきた。た。

「うう…蓮ちゃんのハンバーグ、エビチリ…チャーハン、オムライス」

そんなに食べたいのか。

私の手料理なんぞ、不味くないだけで美味しくもないと思うんだが。

「食べたかったら買ってこない」

「…我慢します」

でもまあ、効果観面だから、よしとしとこう。

「よろしい」

まだ泣いている加奈子さんの頭を少しこそばゆい思いで撫でながら笑った。

蓮&加奈子（元・拍手お礼）（後書き）

蓮の手料理は本人わかってないけどプロ並。  
舌肥えてるので味にはうるさい。

文字習得までの道のりはまだまだ長そうです（元・拍手お礼）（前書き）

一章 13、14 話の間

文字習得までの道のりはまだまだ長そうです（元・拍手お礼）

ファイリン      ファイラード

神子と力ある神官の出現時の明確な年代を調べようということになり、ヴォルドが自室にある本を何冊か引っ張り出して見開いた。

「神子が現れたのはミトレ、ファイアブル、セレーヌの時代だな」

「…？」

ミト…？なんだそれと首を傾げる蓮に、ヴォルドが丁寧に説明する。

「ああ、ミトレは14代皇帝だ。ファイアブルは12代、セレーヌは11代だな」

「皇帝の名前か。ヴォルドは何代？」

「67代だが？」

実のところ、帝国となつてからの話であつて、それ以前の王国の頃のも合わせれば100代は軽い。

が、それまで説明する必要もないだろうと、ヴォルドは敢えて省いた。

「へえ…。よく続くね」

純粹な感嘆の呟きに、ヴォルドは小さく苦笑した。

「この国に限つては他国と違つて特殊だからな」

よく続くというよりは、続かざるをえないのだ。

どうやったところでこの国がなくなることはない。

神の…フィーリーシャ神の逆鱗にでも触れない限りは。

「ふうん。あ、神子の文字発見。……んー、読めない、ヴォルド読んで」

ヴォルドの様子など気にも留めていない蓮は、渡された本を読む…というよりは解読しようと頭を働かせていた。

が、まだまだ使い慣れない文字に早々に諦めをつけて、ヴォルドに本を手渡す。

指さされたところを読んで、ヴォルドは眉間をおさえた。

「…眷属殿、これは神子じゃない。大神官ホフトルだ」

「……………手記なんて嫌いだー!!」

手近にあったクツシヨンを殴って、蓮はそれに顔を埋めた。

この世界にある印刷技術はいわずもがな魔術であり、現代世界にあるような整然とした印刷用文字など存在しない。

書いたものをそのまま印刷するために、書いた人物の癖が文字に表れるのは致し方ない。

「眷属殿はこちらを読むといい。これは私が読もう」

チェ文字にはその癖が出にくい。

だからこそ、ヴォルドはその本を手渡した。

「ありがと。……ヴォルド、これ何て読む？」

最初から読めない文字にぶち当たって、蓮の顔が悔しげに歪んだ。

「聖女だな」

「聖女か。聖女…聖女き、来りて……………」

またしても止まった指に、ヴォルドが見かねて声をかけた。

「読めないのか？」

「チェ文字ってどうしてこう難しいの!？」

本を投げ飛ばす勢いで机に叩きつけ、蓮は声を荒げた。

「言い回しがどうしてもな。私も意味を間違えることが多い」

神子に関しての伝承の誤りも、記憶に新しい。

「くそつ、滅びるチェ文字!」

ほぼ廃れ始めているから、その叫びが叶うのも近いことだろう。

「アフィン文字なら読めそうか？」

ヴェネ文字とチェ文字がダメなら、残るはアフィン文字だけだ。

「読みやすくは…ある、かな」

「どちらだ」

「チェ文字よりかは断然!」

「そうか。なら……、これはどうだ」

アフィン文字で書かれた文献はあまりない。

殆どが教会の管理下にあるためだ。

ともなれば、自然と簡単な内容になるが、これくらいならいいだろうとヴォルドはその本を選んだ。

「…アリイに関する考察？」

「セレーヌの代に現れた神子に関する考察だ」

厚さもさほどなく、絵図付きの本のために文字数も少ない。

子供向けともいえる本だが、内容は下手な本より充実している。

「ほほお」

「とりあえず神子に関するその手の本はあと10冊ある」

「それって10人分ってこと？」

「ああ。出現時期が知りたいのだろう？」

「うん」

「なら、出現した年号と亡くなった年号だけでも先に書きだしてはどうだ？」

「そだね」

「3冊はここにあるが残りの6冊は書庫だな…。私は書庫に本を取りに行ってくる」

机の上に置かれた本を眺めつつ、小さく蓮が笑う。

「取りに行かせる、じゃないんだ？」

「他に持ってきた本の題名がうる覚えでな。それに、自分で探した方が早い」

王様や貴族というのは人を使うのが当たり前だという認識がある蓮にとって、ヴォルドのこういうところには好感が持てた。

「そう。いつてらっしゃい」

快く送り出した蓮に対し、ヴォルドはドアの前でふと足を止めた。

「ああ、そうだ」

「…ん？」

「それはアリイじゃなくてアーミイの間違いだ」

指さされた本のタイトルを改めて見る。

「……………あ、ホントだ」

そこには確かに“アーミィに関する考察”と書かれていた。

文字習得までの道のりはまだまだ長そうです（元・拍手お礼）（後書き）

印刷も魔術ならば、字体が統一されることってないだろうな。  
なんてことを考えたんです。

## 疑惑（元・拍手お礼）

「ねえ」

なんとなしに、先日のアナクのことが思い浮かんで、目の前で本を読んでいるヴォルドに声をかけた。

「どうかしたか」

「どうかしたっていうかさ」

言いにくいなと思いながら、それでも意を決して聞いてみた。

「ヴォルド私のこと幾つだと思ってる？」

「15ではないのか？」

さらりとした返答に、けれど、やはりというか希望的観測が混じっていきそうな気がした。

となるともう少し下かもしれないと考えていると思ってても間違いないなさそうだ。

「…惜しい。私16だから。うん、でさ。ヴォルドは幾つ？」

「31だ」

思ったより年いつてるなとか、そんなこと今はどうでもいい。

この童顔めが！と怒鳴ってやりたい気分でもあったが、それもこの際どうでもよかった。

「ロリコン！」

「ろ…？」

「幼女趣味！」

あれ。たしかこんな意味だったよな。

勢いで怒鳴っちゃったけど、ロリータコンプレックスの正確な意味って何だっけ。

わっかんないや。

などと私が考えていると、ヴォルドからは茫然とした声が漏れた。

「…嫁入りは12からが普通ではないのか？」

「…」

「レーン？」

「随分若いんだね」

あ、でも昔の日本もそれくらいだっけ。

いやいやいやいや。そんなこともないか。

15、6くらい…だったよなあ。

どうだったっけ。

「子を成せるのが10歳から35歳の25年間だからな」

「決まってるんだ」

卵生なのも驚きだが、期間限定かよ…。

「男女関係なく子を成せるのはこの期間だ」

「へえ」

「そのせいか、王族の男児は通常10歳の頃から女をあてがわれる」

それはそれは。

そういえば、ヴォルドはいつから女嫌いになったんだろう。

「…ヴォルドは？」

興味本位丸出しの疑問に、これでもかといったしかめっ面が返された。

「全て部屋から叩きだしたら、11になった時に諦められたな」

「そう」

そこまでくるともう「生まれながらだ」と言われても驚かないわ。

「レーンのところでは？」

「期間はないね。90になっても子供作っちゃう人いるし」

「…すごいな」

口を開けてぽかんとするヴォルドの顔に、思わず笑ってしまいそうになった。

まあ驚愕だよな。

90で子供とか。どうやって育てるんだって感じた。

どっちかっていうと、介護が必要なアンタでしょみたいな。

「節操がないだけでしょ」

だがこれが常識と思われてはたまらないので、ばつさりと切り捨てた。

「そう、だな」

「うん。…にしてもよかった」

「何がだ？」

「ヴォルドが変態の部類の人間じゃなくて」

ロリコンだったらどうしようってちよつと…いや大分心配だったんだよね。

まあ実際ロリコンだったら、さっさと小さい女の子でも宛がわれてそうだな。

「…そんなことを疑われていたのか」

「アナクが私のこと14つて言っただけ、なんか希望的観測が混じってそうだったから」

ヴォルドもだけど。

そう言つと、合点がいったでもいうように、ヴォルドが言った。

「ああ。神子とは総じて小さいという話だったからな」

「神子基準…。普通の基準なら？」

「普通の基準で見ると、レーンの外見年齢は10歳ほどだろう」

「…ふうん」

10…10か。

やだな。向こうでは平均的な身長だったのに。

「レーンはそれ以上成長するのか？」

「…知らない」

出来れば伸びてほしいけど、それこそ希望的観測だ。

「そうか…。出来ればそのままでもいいものだが」

「なんで？」

「大きくても愛らしいだろうとは思つが、小さいほうが愛らしく見えるのは世の常だろう?。」

「……あっそ」

本気でヴォルドのロリコンを疑わなければならなくなったなと遠い目をする私に、ヴォルドは私の頭を撫でながら首を傾げた。

疑惑（元・拍手お礼）（後書き）

どのみちヴォルドは蓮なら何だっていいんだよ。

過ぎ去りし日々（前書き）

蓮の高校生活…？

## 過ぎ去りし日々

「れーんっ！」

天気がいいからと体育館近くの外階段でお昼を採っていると、後ろからいきなり抱きつかれて思わずよろめいた。

そのせいで持っていた弁当が地面にぶちまけられる。

「ちよつと聞いてよ！千代の奴、また別れたって！」

「しかももう新しい彼氏作ってるんだよ！？」

「それも年上！超エリート！！」

「付き合つて二日目でやつちやつたって！」

耳に五月蠅いくらいの声で、友人である香織と未来に捲し立てられて、蓮の眉間には深く皺が刻まれた。

今日は奮発して生姜焼き三枚も入れたのに。

かぼちゃの煮物も、調度いい味で煮付けられたのに。

マカロニサラダ食べたかったな。

無言で弁当の残骸を見つめる蓮に、隣に座っていた幼馴染がぶはつと堪え切れないように笑いだした。

「これやるからそんな恨めしそうな目で見てんなよ」

差し出されたコンビ二弁当に不味いからいらないと首を振った。

「え、わー！ごつめん、蓮！」

「学食いこ！？奢るからさ！」

「いない」

にべもなく断る蓮に、香織と未来は何度も平謝りした。

別段怒っているわけではなく、学食も蓮の舌には合わないだけだ。蓮は二人を宥めすかしながら強制的に空になった弁当を包み直して、ぶちまけられたおかずとご飯を指差し「片づけてね」とお願い

した。

二人は持っていたお昼の入ったコンビニ袋に、残骸を詰め込んでゴミ箱へと走っていく。

「食べなくていいのか？」

幼馴染の龍太郎が今日はバイトだと心配しだす。

蓮にとっては平謝りしてくる二人より、こっちのほうが鬱陶しい。「平気。1食抜かしたところでどうってことないし」

それよりお前は彼女のところにも行って来いよときつく睨めば、喧嘩してるんだと龍太郎は食べていたパンにかぶりついた。

「だからって私のところに来るな。アンタのせいでアンタの可愛い恋人の女子グループに睨まれるの私なんだから」

「蓮ならどうってことないだろ。それにもうそろそろ別れるからいいんだよ」

「……リウも千代とどっこいどっこいだよな。今度はどの子狙い？」  
中学の半ばぐらいからか。

龍太郎に女が途切れたところを見たことがない。

別れて翌日、もっと早ければ数時間後には新しい彼女が出来てくる。

「3組の赤谷。胸がでかくってさ」

「最っ低」

胸か。

今の子は一回やったら具合が良かったからとか言ってたけど、あの子は胸Bくらいだって話だもんな。

もっとあるように見えたのに、寄せて上げてパットとか、女の子って大変だよなと蓮は他人事のように思った。

「林田だって似たようなもんだろ。あっちは顔とスタイル、それ以上金重視だけだよ」

確かに、蓮は深く頷いた。

千代は顔とスタイルがどれだけよくても、金がある人でなければ付き合うことはない。

身体か金かの違いだ。

「どうでもいいけど、毎度毎度、よく後腐れもなく別れられるよね」  
絶対そのうち刺されそうだ。とも思うのに、二人とも別れた後もどちらかといえば友好的な関係を保っているから不思議だ。

この間普通にメールしてたもんなあ。

誰とも付き合ったことがない蓮にしてみれば、別れた後も普通にメールや電話できる二人のその神経などが謎すぎる。

「後腐れなさそうな選んでんだよ。割り切ったお付き合いっての？」

「ちゃんとした恋人つくれなくなるよ」

「いーの。そのうちお前と結婚するから」

「一ヶ月もしないうちに破綻だ、それ」

「あ、結婚はしてくれるんだ？」

しないと加奈子さんがうるさそうだからだ。

一度結婚して数ヶ月もしないうちに離婚すれば、諦めてくれるだろう。

お見合いの斡旋もしないだろうし、そう何度も結婚しろとは言わないはずだ。

「一人暮らし、大変か？」

「別に。一人になった分やること減ったし。バイトも楽しいからそうでもないよ」

「なら、淋しい？」

小さく、蓮の肩が揺れた。

淋しいという感情が、蓮にはわからない。

わからないけれど、一人きりの部屋はとても静かで、無駄に広く感じられるのだ。

「一人が嫌になったら何時でも呼べよ。飯くらいは食いに行つてやるから」

押し黙ってしまった蓮の頭を乱暴に撫ぜ回して言う龍太郎の言葉は、とても優しくほっこりとした温かさがある。

その温かさに目を細めてから、蓮は微かに頷いた。

## 過ぎ去りし日々（後書き）

暑さにやられてこんな話が思い浮かんだ。

蓮の貞操観念云々は、多分この幼馴染と千代ちゃんのせい。

## 七夕用小話（前書き）

2章interval?}??の間くらい

## 七夕用小話

真っ白な空間だった。

真っ白な空間で真っ白な服を着て、私は真っ白な花束を抱えていた。

マーガレットのような花は、蜂蜜のようなとろりとした香りをただよわせている。

行くあてもなく、ぼんやりと佇んでいると、黒で塗りつぶされたような空間を見つけた。

入る気にはなれなくて、奥を覗くように黒い空間の一步手前まで近づく。

黒だけで構成されている空間かと思いきや、ぼんやりと緑と黄色を帯びた光が見えた。

それが人であると気付き、じつと眼を凝らす。

「…ヴォルド？」

紫色の花束を抱えた、よく見知った人間が声に反応してこちらを見る。

口もとに小さく笑みを浮かべて、彼は抱えた花を一輪、黒の中に投げ出した。

ぽとりと、足元に何かが落ちる音がして見てみれば、紫色の花が転がっていた。

「菖蒲」

に似ている気がするが、紫の単色かと思っていた花はどうやら蒼も混じっているし、花自体が両手ほどの大きさで知っているものよりも大きい気がした。

こちらは清廉とした香りがする。

お返しにと、白い花を一輪投げ入れた。

足元に転がった花をヴォルドは屈んで、壊れ物を扱うような繊細さで持ちあげる。

そうしてこちらを見ると、本当に嬉しそうに笑うから、直視できなくて花束に顔を埋めた。

ふと、花が大丈夫なら普通に行き来できるのではないかと考えて、顔をあげる。

未だに至極嬉しそうに花を見つめるヴォルドに、照れくさいやら恥ずかしいやらで顔が引き攣るのを自覚した。

満面の笑みを浮かべているわけではなく、それどころか無表情に近いヴォルドの顔に浮かぶ感情を読み取れる自分に対して、なんだか何ともいえない気分になった。

ちよつと八つ当たりにもいいからヴォルド殴りたい。

ということ、一歩黒い空間へと足を踏み出した。

「レーン！」

焦ったような声がして、はっとなる。

一歩踏み出したはずなのに、黒い空間はいつの間にか消えていた。

「ヴォルド？」

ただただ白だけが埋め尽くす空間の中、茫然と菖蒲に似た花を見つめる。

「ヴォルド」

会いたいな。

そう口にする前に、目が覚めた。

慣れない天井をぼんやりと眺めながら、帰らなくてはと頭が勝手に考える。

そんな中で、自分だけの感情を見つけた。

会いたいな。

毎晩見ていたあの人の顔をもう一度見たい。

そんなことを思つて寝がえりをうつ。

右手が何かを掴んでいるような感覚に不思議に思えば、菖蒲に似た鮮やかな紫と冴え冴えとした蒼の花が一輪、握られていた。

## 七夕用小話（後書き）

一夜限りの逢瀬というかなんというか。  
会話もしてないけど…。

マーガレットと菖蒲に似た花という設定ですが、花言葉はそのまま  
マーガレットと菖蒲で頭の中では起用。  
調べられると面白いかもしれません。

## 自然の摂理も通じません（元拍手お礼）

窓から見える景色は一月経とうと全くもって変わらない。

周囲を見るようになって、そのあまりの変わりのなさに純粹な疑問というものが一つや二つ浮かぶのは自然の道理だ。

「ここって雨降らないねえ」

思わず呟きとなって出た言葉に、心底不思議そうな視線をヴォルドから向けられた。

「？何」

「すまないが、アメとはなんだ」

「……………雨降らないのかあ」

大気の循環とかどうなっているのだろう。

甚だ疑問ではあるが、魔術が発達している世界だ。

世界の造りからして元いた世界とは根本的に違うのだろう。

この空が、宇宙というソラに繋がっていないだろうことと同じように。

「レーン？」

一人納得していても、放っておかれたヴォルドは未だわからないままで。

そもそも、私にとっては当たり前のことすぎて、どう説明しようかと頭を捻った。

水蒸気とかの説明することになるのは面倒だから、思いっきり端折るけど。

「あ……。雨つてのは、空から水が降ってくる現象で」

この説明だけで目を見開くヴォルドに、異世界だなあと実感する。  
「空から、水が？」

「うん。そういうのないんだ？この世界じゃ」

「ないな。始めて聞く。神や精霊が水を落とすことは稀にあるが」  
水を落とす。

現象ではない時点で雨ではなく、よって自動翻訳ができなかったらしい。

「へえ…。この世界の仕組みってよくわかんないわ」

雨がないうことは、水がなくても植物って育つんだろうか。  
んー、わからん。

「そうか？」

私にはわからなくても、この世界の人間であるヴォルドからすれば、常識の範疇だ。

わからないことがわからないといった様子で首を捻られる。

「うん。私のいたところじゃ、雨が降らないと結構大事」

「空から水が降らない程度でか？」

程度。程度…ね。

こんな一言でも、痛感するわ。

この世界の価値観は、私の価値観とは絶対違う。

「程度ですよー。水枯れて干上がっちゃう」

断水とか住んでたところじゃなかったことないけど、大変なんだろうなあ。

「水が降ってこないと、地上の水もなくなるのか？」

「そりゃあ蒸発するだけだからねえ」

「ジョウハツ？」

「…この水って蒸発しないのか！」

「聞いたことはないが」

そうかあ。聞いたこともないかあ。

ていうか会話するのも面倒だな！

わからない言葉を一々説明するほど、私は優しくはないぞ。

「何やら大変な世界だな。水の確保も一苦労そうだ」

自然の摂理が大変となると、こっちの世界じゃまるで簡単そうに

聞こえる。

…待てよ？

ていうかここじゃどうやって水の確保してるんだ？

「こっちはどうなってるの？」

「水か？川や湖から引いてくるな」

あれ。結構普通。

「枯れたりとかは？」

「したことはないな」

…。

「なんで？」

「何故と言われてもな。それだけ融離魔力フイットンが満ちているということだろう」

フイットンとやらが満ちていて、それがなんで、どうして水が枯れないことに繋がるんだ。

「…意味わかんない」

異世界だなあ、ホント。

常識が遥か彼方で、わたしや悲しいよ。

「わからない…か？」

「だってフイットンがまずわかんないし」

もうどうでもいいやと投げやりになる私に、ヴォルドはふっと微笑を浮かべた。

「なるほどな。…世界が違うというのは面白いな」

「そう？」

面白いとは、到底私には思えない。

どちらかという頭が痛くなりそうな感じ。

どっからどこまで私の常識の範囲外なのか、わからない。

それ以前に、全てが常識の範囲外だったりしそうだ。

そんな私の胸中など知る由もないヴォルドは、能天気につ。

「レーンの話を聞いていると楽しい」

「どこが」

「こちらとはあまりに違うからな。想像してみると変な世界だ」

「…変、かなあ」

私にとっては当たり前の世界だ。

あれが変と言われたら、あそこで生きてきた私は立つ瀬がない。

「変だ。子が人の姿のまま母の腹から生まれたり、空から水が降ったり。想像を超える」

けれどやっぱり、この世界の住人からすれば未知の世界だろう。

私にとってここがそうなように、ヴォルドにとって私の世界は想像を超えるものだ。

「まあ、確かに。私もまさか、人が卵生だとは思わなかった」

常識が一気に打ち破られた瞬間だったもんな。

魔術とかはまだ物語に語られたりしている分、そこまで衝撃なかったし。

「そういう想像を超える話を聞くのは楽しいな。夢物語を聞いているようで、実際あるのだと思うと、胸が躍る」

少年のような邪気ない言葉に、なんだか気恥しくなって目を逸らした。

「ふうん…」

「また聞かせてくれ」

「…たまにならね」

頭を撫でる大きな手に、私はそっぽを向いたまま読みかけの本に手を伸ばした。

自然の摂理も通じません（元拍手お礼）（後書き）

雨は無いけど、雪はある。

降るかどうかはわからないが。

ついでに、嵐もありますよ。雨降らないけど。

ありえない対面（元拍手お礼）（前書き）

注：本編とは何ら関係ございません

ありえない対面（元拍手お礼）

「こっちが加奈子さん。私の叔母で、親代わりなの。で、加奈子さんの夫で英明さん」

加奈子さんと英明さんの住まいであるマンションのリビングで、ヴォルドと一緒にソファアに座りつつとりあえず紹介してみた。

「こんにちは」

「…」

真向かいで床にクッションをしいて座る加奈子さんからは、のほほんとした挨拶が返ってくる。

一人掛けのソファアに座る英明さんは、ムスツとした顔でウンともスンとも言わない。

「こっちは一国の王様で、お腹の子の父親の…」

「ヴォルド・フィーシェーラ・ヴィレンツアーレだ」

体格の差違か、窮屈そうにソファアに座りながら、一国の主としての風格はあれど、私の目からすればどこか畏縮した様子でヴォルドが名乗った。

瞬間、加奈子さんから歓声が上がった。

「かつこいい人捕まえたのね！蓮ちゃん！！」

「カナ！それより突っ込むところがあるだろ！？」

冷静な英明さんの突っ込みもなんのその。

加奈子さんに通じるわけがなく。

「えー…。あ、玉の輿！？王様なんだよね！？」

「違う！」

よくよくズレた思考を持つ加奈子さんと、どうして英明さんはこんなに続いているんだらうと甚だ疑問に思った。

やっぱり愛か。

愛の力なのか。

馬鹿なことは、まあ置いておいて。

仕方ないので助け舟を出してみた。

「加奈子さん、英明さんが言いたいのは、何子供作ってんだ！ってことですよ」

「お前が言っな！」

せつかく助け舟出してあげたというのに、何たる言い種。

作った張本人が言うなってか？

強姦だから私に責任ねえっての。

それ以上に…

「やーだって加奈子さん絶対わかってないし」

「そりゃそうだな…」

「でも、そこは蓮ちゃんだし」

がつくりとうなだれる英明さんに、悪びれもなく加奈子さんが言い放つ。

いや、てか。

「それは理由になってねえだろ」

「私だからの意味がわかりません」

幼馴染や友人らと違って、私の貞操は緩くはない。

そのかわり、うっすいけど。

…ん？どっちも変わらないか？もしかして。

わかんなくなっただけ悶々としていると、それまで触らぬ神に祟りなしとばかりに押し黙っていたヴォルドが口をはさんだ。

「流されやすいからという意味ではないのか？」

「ああ…。そうかな？」

「さっすが、ボルさん！」

私ってそんなに流されやすいか？

自分では納得いかなかったが、叔母夫婦な二人が納得しているために、違うとも言えなかった。

自分でわからないだけで、  
実際他人から見ればそう見えるのかも  
しれない。

それにしても。

「発音びみょーに違うよ、加奈子さん」

ボじゃなくてヴオ。

しかも最後のドが抜けている。

ヴォルドもほぼ愛称とそう変わりないのに、これ以上縮めてあげるなど、少し思つた。

「だって言いにくいのお」

確かに、日本人には優しくない名前だ。

ボもヴオも変わんないじゃんと言いたくなる。

「わからんでもないけど…改名しようか？ボルド…つぶ」

試しにボで呼んでみたら、思わず笑ってしまった。

それに対し、ヴォルドが不本意そうな顔をしていて。

「何故笑う？」

「いや、急に安っぽくなったなあって」

セイシャリじや立派な皇帝様だというのに、威厳のへったくれも無くなった感じた。

「安っぽくしとけ。でだ。いきなりいなくなって帰ってきたかと思えば子供とは、どういう了見だ」

堅物な英明さんらしい発言に失笑してしまう。

けど、真っ先に問い詰めるべきはヴォルドじゃなかるうかと思ってしまうのは、私だけか？

問い詰められたら面倒だから、どうでもいいけどさ。

「どうもこうもこういう見。あ、結婚しないから」

「えー————！！！！！！！！！！！！！！」

あまりの大音量に、キーンと高い耳鳴りがする。

「加奈子さん、ひるさい」

「だってだってだってー！蓮ちゃん白無垢は！？ウエディングドレスは！？」

「着ない（もう着せられたし）」（ホワイトデー小ネタ参照）

二度も三度もあんな仰々しいものを着せられる気は、いくら加奈子さん相手とはいえ私にはない。

一度着るだけで充分だあんなもの。

「…うう。蓮ちゃんの結婚式ー！」

本気で悔しがっている加奈子さんに、英明さんは疲れた様に肩を落としている。

「カナ…。お前ももう少し良識もってくれ」

「ヒデちゃんが堅いのよ。結婚しないってどういうことー？」

加奈子さんは軽すぎると思います。とは言えないので、正直に答えた。

「だってヴォルドとは恋人でも何でもないし」

「っな…！？おまつ」

五月蠅い人が五月蠅くなる前に、畳みかけるように言葉を重ねる。

「英明さんは黙ってて。ヴォルドとは話はもうついてるし、一応出産の報告だけ。…ね？」

「ああ…」

ヴォルドに笑いかければ、薄らと蒼褪めた顔で相槌を打たれた。

これつてもしかして、前に言った殺される発言を気にしてるんだろっか。

英明さんが嫌いなのは私であって、ヴォルドじゃないから気にする必要はないのに。

「そっかあ…。じゃあ、結婚する時がきたら教えてね！プロデュースするから！」

「一生しないから、しなくていいよ？」

「うん。準備しとくね。あ、ボルドさん」

人の話聞いてないなあ。

加奈子さんだから当然なのだけど。

「…何か」

「蓮ちゃん泣かせたら、包丁もって押しかけますね！」

いい笑顔で言われて、ヴォルドの顔が俄かに引き攣った。

「そのようなことはないから、普通に訪ねてくれ」

蒼い顔のままけれど毅然として言うヴォルドが可笑しくて、つい加奈子さんに便乗した。

「包丁なんて持ってたなら、まず門番あたりに捕まるんじゃない？ 青酸カリとかのがいいよ」

「それもそっかあ」

青酸カリがなにかは分からなくても、それが毒薬であることには気付いたのだろう。

ほどほどにしてくれと苦く笑いながら、ヴォルドは私の頭を撫でた。

「…馬鹿娘。そいつのこと嫌いなのか？」

毒殺をススめている私に、英明さんが何ともいえない顔で言った。

「え。別に…好きな部類だけど？ でも加奈子さんのが大事」

ヴォルドは加奈子さんよりは下なのは当然のこと。

何を今更とそう返せば、英明さんの表情は更に微妙なモノになった。

「……むくわれねえなあ」

ヴォルドに対し同情する英明さんに、私は訳がわからず首を傾げた。

ありえない対面（元拍手お礼）（後書き）

何にも知らないからこそその英明の反応。  
ヴォルドが一方的に懸想してるとか考えてそう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0951q/>

---

連理の咲く庭 side storys

2011年8月25日03時26分発行